

大塚かぐや姫プロジェクト

OZUKA KAGUYA-HIME PROJECT 2006 - 2008
広島県広島市安佐南区大塚寺谷・中東地区

「大塚かぐや姫プロジェクト」によせて

谷平英俊（大塚・伴南学区社会福祉協議会会長）／「大塚かぐや姫プロジェクト」代表

私も大塚・伴南学区社会福祉協議会は、かねてより地域の大学との交流促進を事業方針の一つとして推進して参りました。

平成17年秋に開催されました「広島市立大学・ニュルンベルク美術大学 アートプロジェクト KHORA」におきまして、大塚の里山を中心に広島市立大学とニュルンベルク美術大学の芸術家によるアート作品を展示する計画に地域として協力させていただいたことが、市立大学と地域の交流の契機となったと思います。このアートプロジェクトでは、芸術家の方々が大塚の里山に繋っている竹林に興味を示し、竹を素材としたアート作品を制作し、農家の庭先、納屋、神社、小学校跡地、田畑、竹林等に展示いたしました。このプロジェクトが、その後平成18年より3か年にわたって実施された「大塚かぐや姫プロジェクト」を始めるきっかけとなりました。

「大塚かぐや姫プロジェクト」では、大学と地域住民が協働で竹林整備をおこない、学生達は竹を素材とした作品制作をし、この地域の環境対策としても美しい景観の保持・創造に繋がる役目を果たしました。

この期間、大学と地域住民が「大塚かぐや姫プロジェクト」を通して、「汗の美学」による交流連携をする素晴らしい機会となり、また竹林ライトアップによる地域交流会では、竹林内での音楽演奏会など神秘的な雰囲気の中、大学と地域のより一層の交流の場となりました。

今後はますます「開かれた大学」・「開かれた地域」として、次々と新しい共同のプロジェクトが生まれ、この地より国際的な芸術家が誕生し、芸術を通して大学と地域がより一層の発展をすることを切望いたします。

最後になりましたがこの3年間の「大塚かぐや姫プロジェクト」に多大なご協力をいただきました地元住民の皆様、竹林地権者の皆様、広島市立大学の教員・学生の皆様、広島市都市整備局西風新都整備部の皆様、また本プロジェクトに助成いただきました財団法人 エネルギア文化・スポーツ財団、財団法人 野村国際文化財団に心より感謝申し上げます。

平成二十一年一月

広島市立大学・ニュルンベルク美術大学
アートプロジェクト KHORA^{コハラ}について



大塚地区を舞台として、広島とドイツの学生、教員が共同で作上げたアートプロジェクト。テーマである「KHORA^{コハラ}」は、全てを生み出す場=母胎を意味する。広島という土地の風土や歴史を認識しながら、芸術によるコミュニケーションを図るものである。

このプロジェクトでの体験を元に、竹という素材にフォーカスを当て、地域と大学の関係を繋ぐものとして大塚かぐや姫プロジェクトに発展していった。



大塚かぐや姫プロジェクト

目的 安佐南区大塚寺谷・中東地区の里山には竹林が多く広がるが、ほとんどは荒れた状態で放置されており、地域の環境や景観に悪影響を与えている。このことから、竹林に人手を加え、京都に見られるような人に優しい竹林を蘇らせるとともに、造形作品の制作を通して、竹を芸術創作の素材として利用することの可能性を大学と地元住民が協働して模索する。

沿革 平成17年度に安佐南区大塚地区で開催されたアートプロジェクト K^{コララー}HORA（広島市立大学・ニュルンベルク美術大学共催）を契機として広島市立大学と地元（大塚・伴南学区社会福祉協議会エリア）の交流が始まった。交流は教育・研究とまちづくりという視点で行うことが検討され、平成18年3月に広島市立大学芸術学部教員と大塚・伴南学区福祉協議会役員との話し合いの場で本プロジェクトが提案され「大塚かぐや姫プロジェクトチーム」が結成された。

■大塚かぐや姫プロジェクトチーム

代表 谷平英俊（大塚・伴南学区社会福祉協議会 会長）
副代表 前川義春（広島市立大学芸術学部 教授）
委員 梶山正治（大塚・伴南学区社会福祉協議会 副会長）
山根孝信（大塚・伴南学区社会福祉協議会 理事）
南昌信（広島市立大学芸術学部 教授）
関村誠（広島市立大学大学院芸術学研究所 准教授）
ウルリケ・ヴェール（広島市立大学国際学部 教授）
吉田幸弘（広島市立大学芸術学部 准教授）
大塚智嗣（広島市立大学芸術学部 准教授）
監事 平成18、19年度
沖村義春（広島市都市整備局西風新都整備部 主査）
平成20年度
森本隆幸（広島市都市整備局西風新都整備部 主幹）

主催 大塚かぐや姫プロジェクトチーム
共催 広島市立大学
大塚・伴南学区社会福祉協議会
協力 広島市都市整備局西風新都整備部
助成 平成19年度
財団法人 エネルギア文化・スポーツ財団
平成20年度
財団法人 野村国際文化財団
財団法人 エネルギア文化・スポーツ財団
協賛 平成20年度
コカ・コーラウエストジャパン株式会社
カルビー株式会社

平成18年度
広島市立大学国際学術研究費事業
平成19、20年度
広島市立大学平成指定研究
平成20年度
ひろしまの森づくり県民税 財源活用事業

支援協力 平成18年度
文化芸社（株）
平成19、20年度
文化芸社（株）
（有）タカタ建設

■会期

平成18年度
9月20日～30日 竹林整備
平成19年度
9月4日～29日 竹林整備・作品制作
10月1日～15日 作品展示（展覧会）
平成20年度
9月8日～30日 竹林整備・作品制作
10月1日～19日 作品展示（展覧会）

開催場所 広島市安佐南区沼田町大塚寺谷・中東地区竹林

Web <http://ozuka.art.hiroshima-cu.ac.jp/>

技術提供・技術協力
白木竹筒スピーカー工房 松本敏夫
株式会社いけうち（霧のいけうち）
広島市立大学 電子音楽部

報道 中国新聞、朝日新聞、NHK広島放送局、広島テレビ、
広島ホームテレビ、テレビ新広島、RCCラジオ

Contents

- 6 前川義春 美的文化と環境 - 大塚かぐや姫プロジェクト -
平成19、20年度広島市立大学指定研究 報告
- 10 森本隆幸 「大塚かぐや姫プロジェクト」とまちづくりに寄せて

2006

- 13 大塚かぐや姫プロジェクト2006
- 14 竹林整備記録
- 18 展示：フランス留学フェア
- 20 展示：沼田ふるさと祭り
- 21 展示：竹林ライトアップ
- 22 展示：広島市立大学 大学説明会

2007

- 25 大塚かぐや姫プロジェクト2007
- 26 竹林整備・公開作品制作記録
- 30 作品図版
- 46 竹林ライトアップ・地域交流会

2008

- 49 大塚かぐや姫プロジェクト2008
- 50 竹林整備・公開作品制作記録
- 54 作品図版
- 76 竹林ライトアップ・地域交流会

78 報道資料

- 81 マライケ・ドロブニ "begegnung" < 出会い >
- 83 河原佑貴子 大塚かぐや姫プロジェクトを終えて
- 84 中島正博 大塚かぐや姫プロジェクト：里山利用は環境革命の前線
- 87 ウルリケ・ヴェール 大塚かぐや姫プロジェクトと「監視」の論理
：美術と社会と国家との関係への考察
- 89 関村誠 竹林と身体

前川義春（広島市立大学芸術学部 教授／「大塚かぐや姫プロジェクト」副代表）

1. はじめに

「大塚かぐや姫プロジェクト」は平成19、20年度広島市立大学指定研究費を受けて開催されたものである。その前年、平成18年度には広島市立大学国際学術研究「広島市立大学・ニュルンベルク美術大学 アートプロジェクト KHORA」の関連事業として、試行的に大学と地域が協力して10日間の竹林間伐・整備を行った。

この3年間の「大塚かぐや姫プロジェクト」の概要と成果について、以下研究報告をおこなう。

2. 研究組織

[研究組織員]

芸術学部・教授 前川 義春（研究代表者）／国際学部・教授 関村 誠／国際学部・教授 ウルリケ ヴェール／芸術学部・教授 南昌伸／芸術学部・准教授 吉田 幸弘／芸術学部・准教授 大塚 智嗣／芸術学部・助教 秋山 隆

[研究協力]

大塚・伴南学区社会福祉協議会

広島市都市整備局西風新都整備部

芸術学部・客員教授（元ハノーバー専科大学教授） 藤原 信／国際学部・教授 中島 正博／芸術学部・教授 伊東 敏光／芸術学部・助教 梶原 正朗／芸術学部・非常勤助教 土井 満治／芸術学部・非常勤助教 竹内 雅人／芸術学部・非常勤助教 和気 琢哉／芸術学部・元非常勤助教 松前 美保／芸術学部・元非常勤助教 藤江 竜太郎

[助成]

平成19、20年度/(財)エネルギー文化スポーツ財団

平成20年度/(財)野村国際文化財団

平成20年度ひろしまの森づくり県民税補助事業

3. 研究の背景

平成17、18年度本学国際学術研究費により、本研究組織員を中心として「広島市立大学・ニュルンベルク美術大学 アートプロジェクト KHORA」を組織した。此のプロジェクトは都市（地域）が芸術によって、より文化的に成熟していく方法の実践的プロジェクトを国際的視野で行うことを目的とし、現地での作品制作、研究会を行うアーティスト・イン・レジデンスと、その成果発表となる展覧会の2つのプログラムを主に構成され、前期プロジェクトを平成17年に日本（広島）において、後期プロジェクトを平成18年にドイツ（ニュルンベルク）において開催し、それぞれ日独教員、学生20名が参加した。

上記のアートプロジェクトでは、平成17年にここ大塚寺谷・中東地区の里山・竹林を舞台に作品展示を行い、国際的視野での地域と芸術、場と作品の関係について実践的に考察する機会を得た。あわせて地域住民の方々から様々な協力を得、これを契機として市立大学アートプロジェクトチームと地元（大塚・伴南学区社会福祉協議会エリア）の交流が始まった。交流は教育・研究とまちづくりという視点で行うことが検討され、大塚・伴南学区社会福祉協議会役員との話し合いの場で、大学と地元住民が共同で地域環境と芸術の融合を実践する「大塚かぐや姫プロジェクト」が提案された。

此の提案に基づき、平成18年度には以下の地元との共同作業及び実験展示を行なった。

■平成18年9月20日～30日の期間、広島市立大学教員、学生、留学生、地元住民参加約30名による竹林整備（竹間伐、竹林内掃除）

■平成18年9月24日、樹木医・長井稔氏による竹林講演会（大塚集会所）

■平成18年11月7日「フランス留学フェア」意見交換会場（本学本部棟1階ロビー）にて、竹100本、蠟燭500個、映像による実験展示

■平成18年11月11・12日「沼田町ふるさとまつり」会場（沼田公民館前空地）にて、竹、蠟燭500個による実験展示

■平成18年11月28日「竹林ライトアップ」（安佐南区大塚、竹林整備事業跡地）蠟燭500個による竹林ライトアップ

■平成19年1月9日「大学説明会」会場（本学中庭全体、芸術資料館）にて、竹400本、蠟燭2000個、映像による実験展示

これらの共同作業及び実験展示のもと、本研究組織員が大塚・伴南学区社会福祉協議会、広島市都市整備局西風新都整備部の協力を得て、平成19、20年度本研究を推進していくこととなった。

4. 研究目的

安佐南区大塚寺谷・中東地区の里山には竹林が多く広がるが、ほとんどは荒れた状態で放置されており、地域の環境や景観に悪影響を与えている。このことから、竹林に人手を加え、京都に見られるような人にやさしい竹林を蘇らせるとともに、造形作品の制作を通して、竹を芸術創作の素材として利用することの可能性を模索することを目的とする。

またこのプロジェクトを通して、国際的な視野の中で地域の文化的アイデンティティを成熟させていくことを目指し、芸術活動が都市や地域において新たな役割を担う視点を提示する実践的プロジェクトとする。

またこれらの成果を平成20年度中に報告書(カタログ)としてまとめ、今後の研究・教育、地域創造、国際交流

等に生かしていく。

5. この研究計画の学術的な特色・独創的な点及び予想される結果と意義

本研究は大学関係者と地元住民が共同で参画し、地域の環境整備及び地域創造を行なおうとするものである。竹林整備と造形素材としての竹の可能性を探るという実験研究であるが、地域のもつ可能性を引き出すための手がかりとして、また造形作家にとっては、作品や芸術活動がより積極的に社会や環境と関わっていくための試行ケースとなり、今後の更なる展開に繋がる可能性がある。

6. 内外の関連する研究の中での当該研究の位置づけ

竹は岩手県以南の日本全国に繁茂し、日本の文化・風土を構成する重要な要素であるにもかかわらず、近年その整備は滞り、旺盛な繁殖力から各地で大きな環境問題をもたらしている。その反省から今日では、地域の森林ボランティアが竹林の整備を行なうようになった。また建築材（床フローリング）やプラスチック強化材等、現代の生活に必要な素材に転用する研究も行なわれるようになってきた。

一方、竹は古くから土壁の芯材や京都の伝統的民家の軒先に見られる竹矢来等の建築材、民芸品の材料として使用されてきたが、美術大学での造形素材として使用されることはめったに無かった。しかし実際の制作に携わってみると、直線的な構成作品や曲線的・量的な作品にも使用出来、造形制作や造形感覚の鍛錬にきわめて適した素材であると感じた。美術系の大学研究者によって、地域環境整備を兼ねた竹林伐採から、それを素材とした造形制作までを統一的に行うことには、芸術分野における日本の美意識の現代的構築を考えることでもあり、国

際的視野から見ても意義あることであると考える。

7. 平成20年度までの研究の評価

平成18年夏に、約10日間の日程で教員、学生、地域住民延べ30名により、大塚寺谷地区の竹林間伐700本・整備面積約0.3ヘクタールを行った。平成19年は18日間の日程で、昨年分の竹林再整備、その後新規0.2ヘクタール、700本の竹間伐を行い、引き続き竹林内で竹による作品制作を行なった。また平成20年には20日間の日程で、過去2年の竹林再整備と新規0.5ヘクタール、合計1ヘクタール1000本の竹間伐を行い、引き続き竹林内で竹による作品制作を行なった。

竹による本格的な作品制作は初めての経験であったが、短い期間の中で、平成19年には13点、平成20年は17点の作品を作り上げ予想外の大きな成果であったとともに、それぞれが異なった竹へのアプローチをしたために、大変多様性に富んだ造形作品となった。またプロジェクト会場となったこの竹林は棚田が竹林化したものであり、場所によっては15メートルほどの高低差があり、この棚田の地形を生かした制作・展示がおこなわれ、棚田そのものが立体的展示場となり、芸術表現の場としても大変斬新で魅力的な構成にすることができた。

実際に制作に携わってみると、竹は切る、割る、曲げる等の基本的加工が考えていたより容易く、素早い作業が出来る。従ってある程度作業を進めても、その過程で新しいアイデアが浮かんだ場合など、やり直し・修正がおこないやすいため、次々に良いプランに変更できる利点があった。

一方彫刻制作等で使用する素材、例えば石や木、金属

等は環境の中での耐久性には優れているが、加工が専門的で高い技術を要することと修正が困難なため、完成までを見越した綿密なプランニングを行なわなければならない、そのためにややもすると慎重になり過ぎ、勢いに欠けた造形になってしまうことも多く、この壁を乗り越えることが出来ない学生のケースを見かけることがある。しかし竹による造形ではまず自分の力量にあった技術・造形プランから作品制作に着手し、制作を進めながら新しいアイデアを積み重ねることが出来るため、結果的に自分が予想した以上の造形作品につなげることが出来、造形の基礎訓練の素材としては大変適していると感じられた。

また平成19、20年には、本学と交換留学をさかんにおこなっているドイツからの留学生が本プロジェクトに加わり竹林整備・作品制作を行なった。ドイツには竹林がないため、竹に関するすべてが初めての経験であったにもかかわらず、日本人学生とも親しく関わりながら、大変積極的な制作を行なった。

過去にドイツにおいて間伐木材による造形制作に関わった経験を持つと言うが、切る、割る等の基本的加工が大変なことと、重量が重いために作品制作が思うように出来なかったことに引き換え、竹は自由な発想のもと思い切った制作が出来、整備後の竹林内部の環境が日本の風土の特性と美意識が感じられる神秘的・幻想的な場となり、大変貴重で有意義な経験になったとの感想であった。また日独の学生が同じ制作の現場で、それぞれの創作を通して自然なコミュニケーションをとることは、国際交流の面から見ても将来に繋がる良い経験と感覚を身につけるための場になったのではないかと考えている。

さらに竹林ライトアップでは、毎回200名以上の来場者を迎え、数千個に及ぶ幻想的な蠟燭の灯りのもと、音楽会等のイベントを通して大学と地域の交流会が開催され、秋の夕べを共に楽しむことができた。

本来人間は深く自然と接することで、健康な身体と柔軟な精神を保つことが出来ると考えているが、現代ではその機会を得ることが稀となった。竹林内の神秘的で幽玄な雰囲気を経験でき、日本の美意識を深く感じる事が出来る数少ない場であり、学部を超えた多くの学生に体験してもらいたく考えている。芸術学部の学生にとっては、自分の専門とする分野において高次の創作を極めることが最重要であることは言うまでもないが、一方で早い時期から柔軟な芸術的思考を育成することも必用であり、その一つとして芸術を通して環境問題を考えながら行なわれた此の度のプロジェクトは、都市部の美術大学では経験できないことであり、この有意義な創造の場を最大限に利用して欲しいと考えている。

今後は竹をはじめとする様々な素材・方法を通して社会の中で実践的な芸術活動を行う教育プログラムや、この教育効果を下地としたより積極的に社会と連携した研究プログラムをおこなっていきたいと考えている。

8. 謝辞

平成17、18年度広島市立大学国際学術研究「広島市立大学・ニュルンベルク美術大学アートプロジェクト KHORA」及び平成19、20年度広島市立大学指定研究「大塚かぐや姫プロジェクト」を通しまして、地元大塚・伴南学区社会福祉協議会、広島市都市整備局西風新都整備部の皆様方には、組織をあげて多大な

研究協力をいただき心よりお礼申し上げます。また竹林の地権者の皆様方には竹林を快くご提供いただき、地域の方々には学生を我が子や孫のようにかわいがっていただくとともに、竹林整備のご指導、ご協力をいただきましたこと心より感謝いたします。

元ドイツ、ハノーバー専科大学教授 藤原 信氏（現芸術学部・客員教授）には、両プロジェクトの実現に向け様々な形でのご指導と協力参加をいただき、さらに平成20年の「大塚かぐや姫プロジェクト」では長期間この地に滞在していただき、竹林整備、作品制作、学生の指導、地域講演をしていただき、本研究の大きな原動力となりました。心より感謝申し上げます。

また最後になりましたが財団法人 エネルギア 文化・スポーツ財団、財団法人 野村国際文化財団からは研究助成をいただき、本研究プロジェクトにおいて教育・研究面で大きな成果を得ることができました。ここに厚く感謝申し上げます。

平成二十一年一月

「大塚かぐや姫プロジェクト」とまちづくりに寄せて

森本隆幸（広島市都市整備局西風新都整備部 主幹／「大塚かぐや姫プロジェクト」監事）

西風新都の都市づくりは、広島市安佐南区沼田地区及び佐伯区石内地区において、平成元年策定の「ひろしま西風新都建設実施計画」（当初計画）に基づき、国、県の支援と経済界等の協力を受けながら、地域住民、民間開発事業者及び広島市が適切な役割分担と協力関係のもとに進めてきました。当時、本市は、市全体の均衡ある発展を目指すという基本的な考えのもとに、「住み」「働き」「学び」「憩う」といった複合機能を備えた新たな都市拠点「西風新都」の建設を目指し、その実現のため西風新都の中心部に位置する大塚地区に、土地区画整理事業による「都市センター機能」の導入を計画しました。

こうした本市の計画を受け、地元では平成6年に「大塚まちづくり協議会」（平成10年に「大塚まちづくり推進協議会」に改組）が発足され、同協議会において平成15年までの延べ10年間に渡り、土地区画整理事業を前提とした勉強会や検討が重ねられました。この間、本市も都市センター機能の導入を目指し、平成3年から地元と協議を進めましたが、社会経済情勢の大きな変化や財政状況の悪化などにより、当初計画どおりの事業推進が厳しい状況となり、平成16年2月、やむなく土地区画整理事業の中止を決定しました。

この中止決定は、地元には大きな落胆をもたらす結果となりましたが、引き続き「我がまち大塚のまちづくり」を推進していきたいとの意向を受け、本市は、それまでの経緯や大塚地区の立地特性等を考慮し、引き続きまちづくり活動を支援することにしました。

平成16年度からは、それまでの行政主導から住民主体のまちづくりへと転換し、地元と協議を重ねていく中

で土地区画整理事業中止による脱力感を解消し、まちづくりへの機運を盛り上げたいとの意向を受け、本市の提案により、同年10月、地元住民や本市職員などで「竹のオブジェ」を制作し棚田に展示しました。

この「竹のオブジェ」展示が、広島市立大学芸術学部に関心を惹き、翌平成17年度に広島市立大学とドイツのニュルンベルク美術大学との共同企画による「アートプロジェクト」の開催へと展開し、大塚地区の休耕田や竹藪などを主会場に竹を素材とした作品展示が行われるなど、地域と大学との交流が始まる「きっかけ」にもなりました。平成18年度からはこの「アートプロジェクト」の開催を契機に、広島市立大学芸術学部と地元が連携し、地域に広がる荒廃した竹林に手を入れ魅力ある空間を創る活動として「大塚かぐや姫プロジェクト」が3年間開催され、竹林整備に加え作品展示やライトアップ、地域交流会の開催など年々充実され、その間地元の参加者も増えるなど地域と大学との交流も密になりました。

同時期、本市は当初計画策定以後の経済情勢の大きな変化を受け、丘陵部の企業立地や平地部の面的整備が進まないことなどから当初計画の見直しの検討に着手し、「ひろしま西風新都建設実施計画見直し検討委員会」などで検討を重ね、平成20年2月「ひろしま西風新都都市づくり推進プラン」を策定しました。この「推進プラン」は、産業の活性化や高次都市機能の充実・強化、計画的な宅地供給を目的とした都市づくりの方針を掲げていますが、一方では芸術に触れる場の拡充や地域に密着した文化の創造により、芸術・文化を生かした都市づくりを促進する方針を掲げており、その取組の事例として

「大塚かぐや姫プロジェクト」の活動も紹介しています。

本市としては、土地区画整理事業を中止決定した平成16年以降、地元のまちづくりについて色々と模索しましたが、この活動を契機に地域と大学との交流が始まり、地域の空間や資源を活かしたまちづくりへ、特に芸術を切り口としたまちづくりへの展開は、地域資源の再認識や芸術に触れる機会の創出、景観の見直しにも繋がり、地元のまちづくりを支援している本市にとっても大変効果的で有意義な活動となりました。このプロジェクトは今年度で当初より計画されていた3カ年という区切りを迎えましたが、本市としては、芸術・文化を生かした都市づくりの促進に向け、引き続き取り組んでいきたいと考えています。

最後に、プロジェクトを推進された広島市立大学の教職員の皆様や学生の皆様、プロジェクトに協力された大塚・伴南学区社会福祉協議会の皆様を始め、地権者の皆様や地元の皆様に感謝するとともに、近い将来の活動再開を期待しまして私の寄稿とします。

平成二十一年一月

アストラムライン

大塚駅

広島修道大学

山陽自動車道

プロジェクト会場

広島市立大学



2006

9.20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	竹林整備

11.7	11	28									フランス留学フェア
											第31回沼田町ふるさと祭り
											竹林ライトアップ
											.
											.
											.
											.
											.
											.
											.
											.
2007.1.9											広島市立大学 大学説明会

竹林整備記録

参加者名簿

■地域

上瀧真佐子（東区在住）
出張良二（安佐南区在住）
高松直實（佐伯区在住）
北野義明（西区在住）
木村東吾
（彫刻専攻卒業生、東広島市在住）
谷平英俊
（プロジェクト代表、安佐南区在住）
梶山正治
（プロジェクト委員、安佐南区在住）
山根孝信
（プロジェクト委員、安佐南区在住）
沖村義春
（プロジェクト監事、佐伯区在住）

■学生

土井満治（彫刻 博士2年）
竹内雅人（彫刻 博士2年）
渋谷洋介（彫刻 修士2年）
野原邦彦（彫刻 修士2年）
三上賢治（彫刻 修士1年）
胡井ひさ子（立体造形 修士1年）
和気琢哉（立体造形 修士1年）
豊嶋春香（彫刻 3年）
小西寛之（彫刻 2年）
久保寛子（彫刻 2年）
土居大祐（彫刻 2年）
池田美和子（彫刻 2年）
七瀬綾乃（彫刻 2年）
山田亜衣（彫刻 2年）

石本史織（立体造形 2年）
伊東志織（立体造形 2年）
稲津あや子（立体造形 2年）
上野晃宏（立体造形 2年）
片本えりか（立体造形 2年）
加藤彰訓（立体造形 2年）
国見こずえ（立体造形 2年）
小早川瀬奈（彫刻 1年）
船附一裕（彫刻 1年）
天野祐希（彫刻 1年）
福島静佳（彫刻 1年）

■留学生

ジュリアム・ダティレス・ベラ
（フィリピン大学／彫刻）

■教員

前川義春（芸術学部教授／彫刻）
吉田幸弘（芸術学部准教授／立体造形）
関村誠（芸術学研究科教授／美学）
藤江竜太郎（芸術学部T A／金属造形）
松前美保（芸術学部T A／立体造形）

2006.9.19



プロジェクト開始前日、下見に訪れる。竹林は大塚寺谷・中東地区山間部の道路沿いに広がる。近隣には民家や畑があり、大学生の通学路になっているが、うっそうとした外観は不安を与える。

2006.9.20



早速竹林に立ち入る。光が届かないほど竹や朽ち木、雑草が溢れ、林は足の踏み場もないほど荒廃している。成長の早い竹に対して整備が追いつかない現状がある。

2006.9.21



間伐にあたり、残すべき若くて健康な竹にはビニールテープで目印をつける。成長して3年以上経ったものや細いものを中心に切り出す。

2006.9.21



まず倒す方向に1/3ほど切れ込みを入れて、残りを反対側から切る。こうすると竹の重みで刃が挟まれる心配が無く、簡単に切り倒せる。

2006.9.22



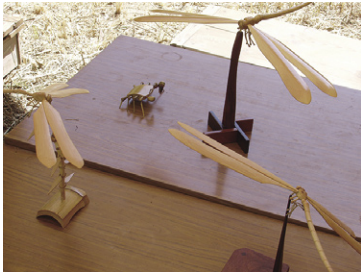
切り出した竹にロープをかけ、滑車を使いながら引き上げる直前まで地面と繋がっていた竹は水分を含み、相当の重量がある。

2006.9.23



視界の広がった竹林内部から広島市立大学を望む。距離で言えば500メートル程度と近いこともあり、学生が気軽に参加することができた。

2006.9.23



この竹細工は地元住民の方の手作り。竹の表情や性質を十分に生かし独特の表現がなされている。昔から竹がいかにかに研究されていたかが伺える。

2006.9.24



大塚集会所にて、樹木医・長井稔氏による竹の講習会が開かれた。竹の基本的な性質、材料としての扱い方などの指導を受ける。

2006.9.27



取り除いたゴミ。整備によって美しくなった竹林はゴミの不法投棄を激減させた。どんな注意書きよりも人々の意識を変える力を持つ。

2006.9.28



バケツリレーの要領で竹の破片等運び出す。この日は近隣に住まいの方々から協力を受けることができた。活動が少しずつ浸透してきている。

2006.9.29



竹割りの実演が行われた。十字に組んだ木板を使い、繊維方向に食い込ませながら四等分する。学生は竹が持つ独特の性質に関心を向けていた。

2006.9.30

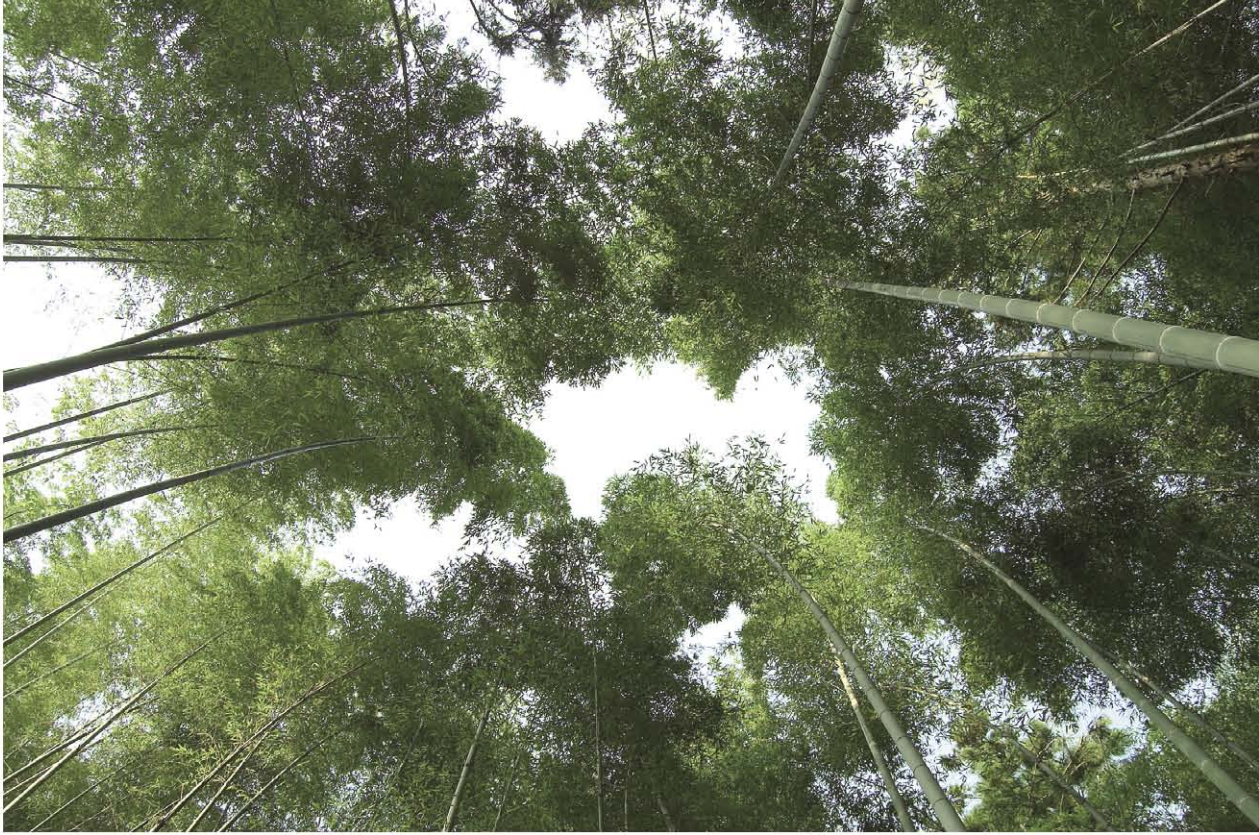


間伐が終わり、切りくずや端材を運び出す。大きな袋を抱えながら余裕を持って歩けるほど、竹同士の間隔が確保できた。

整備後の竹林

この年はおよそ500本の竹を間伐した。初年度ということもあり整備区画は入口周辺のみにとどまったが、竹林の様子は明らかに変化し、竹以外の植物が育たなかった地面にも光が差し込むようになった。





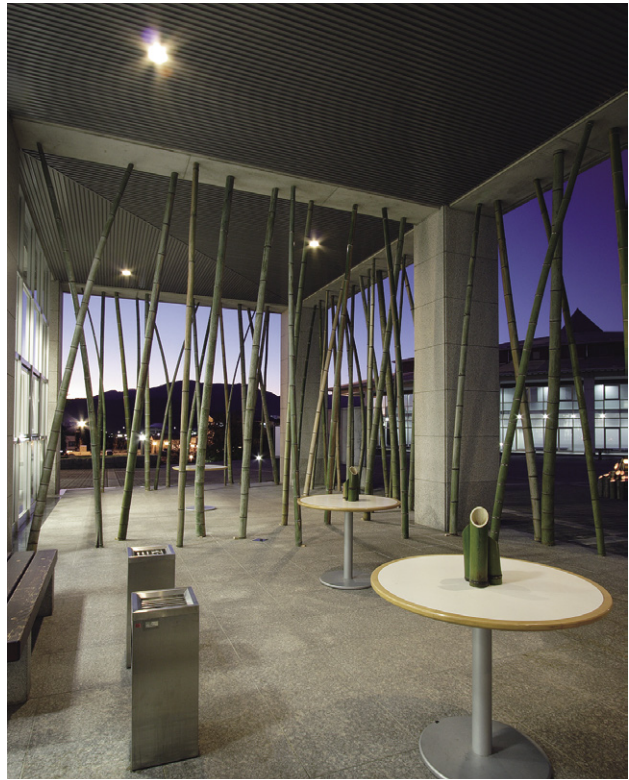
2006.11.7

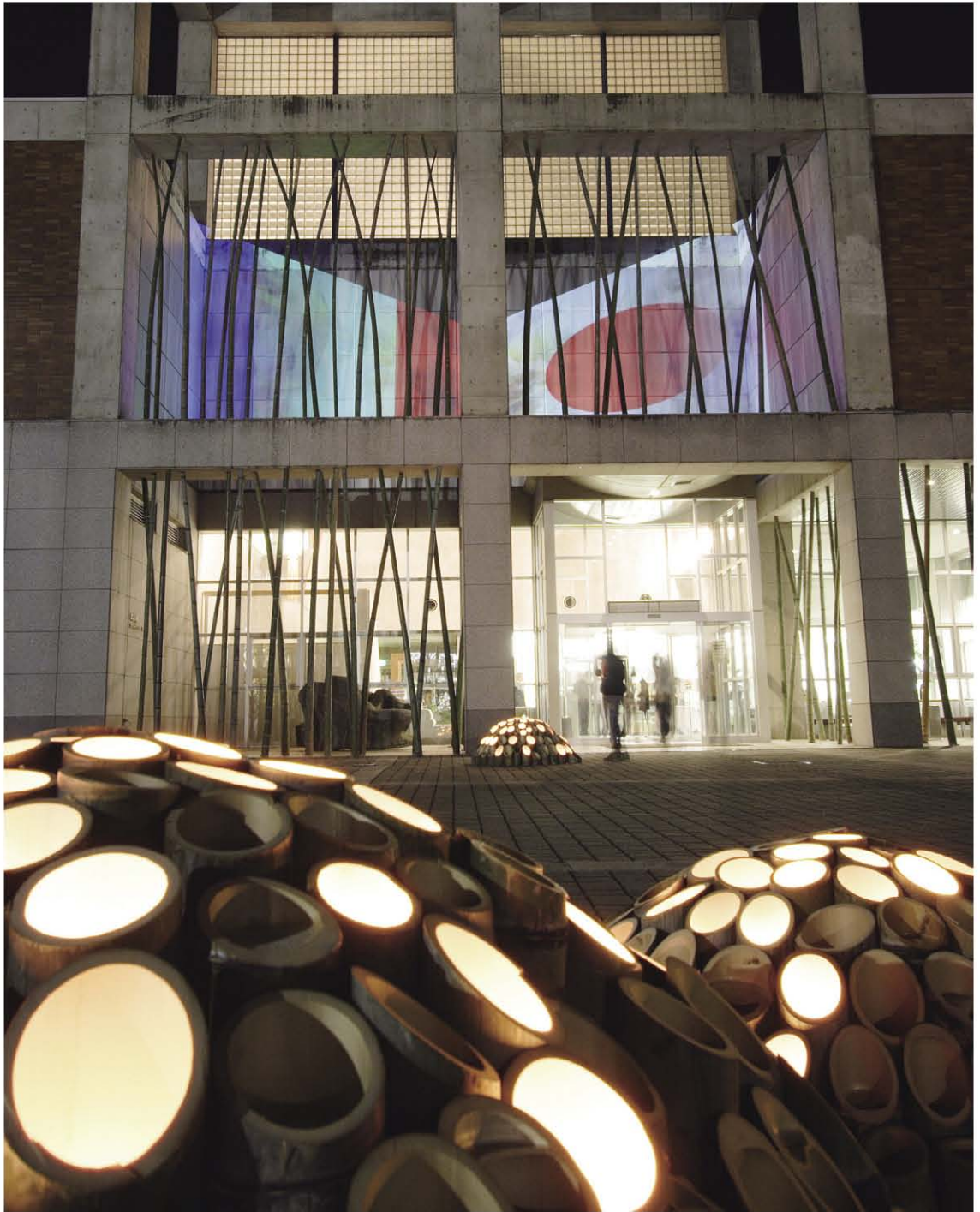
展示：フランス留学フェア

広島市立大学とフランス国内の美術大学との交流を図るための催しが行われた。この会場設営に合わせ、切り出した竹を利用して、ヒカリゴケをイメージしたオブジェを制作した。夜になるとその中にキャンドルの柔らかな光が灯り、会場は暖かな雰囲気包まれた。

また本部棟エントランスには竹をダイナミックにあしらった空間が設けられ、日仏の交流をイメージした映像とともに来場者を迎え入れた。

学生たちは普段は個人制作の範囲を出る機会が少ないため、こうした空間演出に対して特に大きな興味を持ち、今後の大塚かぐや姫プロジェクトへの関心を高めていった。





2006.11.11 - 12

展示：第31回沼田町ふるさと祭り

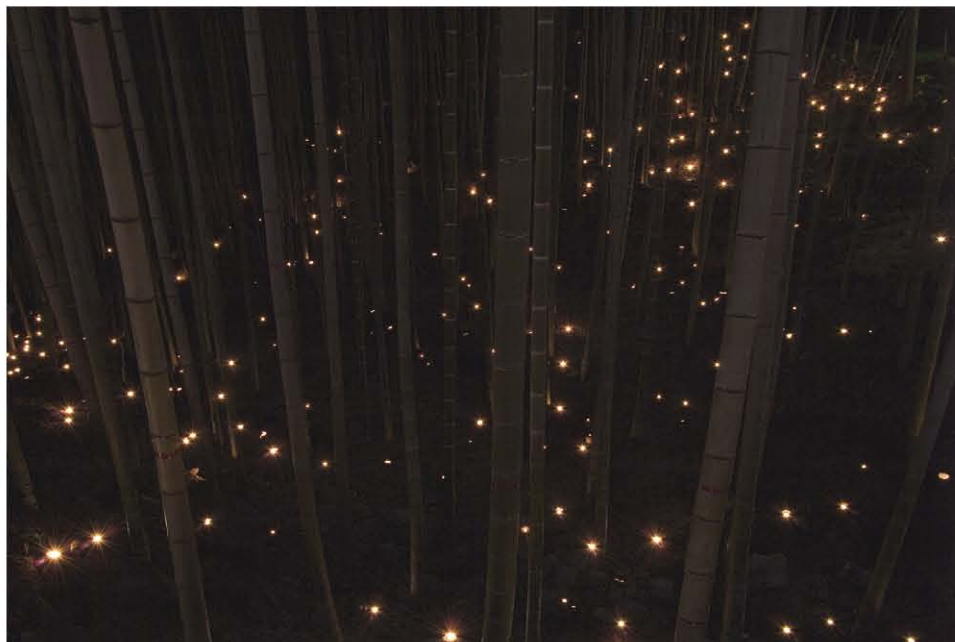
隣接地区である広島市安佐南区沼田町の秋祭り「沼田町ふるさと祭り」の会場の一角を借りて、先のフランス留学フェアで作成したオブジェを展示した。11日午後5時、地域の来場者とともにキャンドルへの点火作業を行った。その後、通りかかる人々に声をかけながら点火を手伝って頂いた。子どもたちは特に楽しそうに物珍しい行事へ参加していたようである。大学と地域の間でアートを交えた交流ができたことは、お互いにとって有意義な体験であった。



2006.11.28

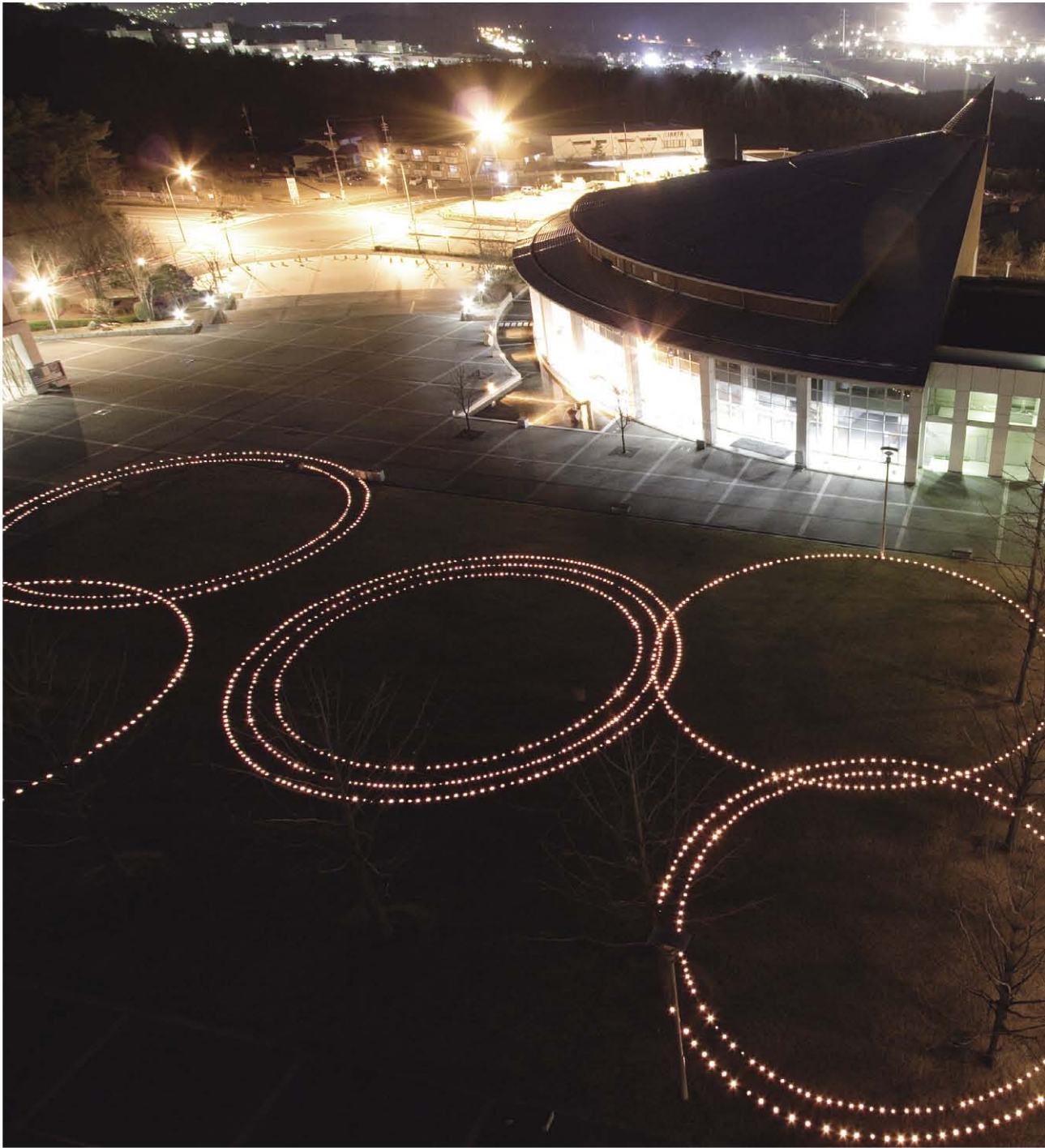
展示：竹林ライトアップ

整備された竹林をライトアップして一般公開した。これまで伐採した500もの切り株にキャンドルを一つずつ置いて点火し、竹林を幻想的で美しい光景へと変化させた。



2007.1.9

展示：広島市立大学 大学説明会





広島市立大学の大学説明会において、中庭全域と芸術資料館展示室を使って巨大な竹のアート作品を制作した。

中庭に2000個もの輪切りにされた竹を複数の中心点に対して同心円状に並べ、一つずつにキャンドルを仕込み点灯した。今回は学長を始めとした本学事務職員の方々にも協力を受けながら展示を完成させることができた。

展示室では竹の柱を並べてパーテーションとを設置。また外壁を巨大なスクリーンと見立ててプロジェクターから映像を投影した。



2007

9. 10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

— 関連講演会

— 竹林整備・公開作品制作

10. 1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14

— 竹林ライトアップ・地域交流会

— 作品展示

竹林整備記録

参加者名簿

■地域

田中孝雄 (佐伯区在住)
 上瀧真佐子 (東区在住)
 出張良二 (安佐南区在住)
 杉本和昭 (安佐南区在住)
 高松直寛 (佐伯区在住)
 木村東吾
 (彫刻専攻卒業生、東広島市在住)
 谷平英俊
 (プロジェクト代表、安佐南区在住)
 山根孝信
 (プロジェクト委員、安佐南区在住)
 沖村義春
 (プロジェクト監事、佐伯区在住)

■学生

土井満治 (彫刻 博士3年)
 永田浩代 (彫刻 修士2年)
 三上賢治 (彫刻 修士2年)
 三宅良子 (彫刻 修士2年)
 秋貞茉莉 (彫刻 修士2年)
 和気琢哉 (立体造形 修士2年)
 山田哲平 (彫刻 修士1年)
 河原佑貴子 (彫刻 修士1年)

田中秀樹 (彫刻 修士1年)
 黒田大祐 (彫刻 4年)
 豊嶋春香 (彫刻 4年)
 池田美和子 (彫刻 3年)
 小西寛之 (彫刻 3年)
 久保寛子 (彫刻 3年)
 山田亜以 (彫刻 3年)
 七瀬綾乃 (彫刻 3年)
 土居大祐 (彫刻 3年)
 天野祐希 (彫刻 2年)
 大塚寛子 (彫刻 2年)
 小野愛 (彫刻 2年)
 小早川瀨奈 (彫刻 2年)
 福島静佳 (彫刻 2年)
 黒崎泰広 (油絵 2年)
 三坂優 (油絵 2年)
 堀宗佐 (情報科学部 2年)
 島田美緒 (漆造形 3年)
 都野夏未 (漆造形 2年)
 一田朝里 (漆造形 2年)
 衣笠雄範 (染織造形 2年)
 前西麻里絵 (金属造形 2年)
 石本史織 (立体造形 3年)
 伊東志織 (立体造形 3年)

稲津あや子 (立体造形 3年)
 上野晃宏 (立体造形 3年)
 片本えりか (立体造形 3年)
 加藤彰訓 (立体造形 3年)

■留学生

インドラ・M・ヘン
 (アラヌス大学/ドイツ)
 マライケ・ドロブニ
 (アラヌス大学/ドイツ)
 ヤスミン・フルスト
 (アラヌス大学/ドイツ)
 チョ・ヒヨンス
 (大邱カトリック大学/韓国)

■教員

前川義春 (芸術学部教授/彫刻)
 吉田幸弘 (芸術学部准教授/立体造形)
 関村誠 (芸術学研究科教授/美学)
 南昌伸 (芸術学部教授/金属造形)
 大塚智嗣 (芸術学部准教授/漆造形)
 伊東敏光 (芸術学部准教授/彫刻)
 秋山隆 (芸術学部助教/彫刻)
 藤江竜太郎

(芸術学部非常勤助教/金属造形)
 松前美保
 (芸術学部非常勤助教/立体造形)
 野原邦彦
 (芸術学部非常勤助教/彫刻)

■差し入れお礼

熊本雪夫
 田中孝雄
 倉掛房江
 岡真由美
 上瀧真佐子
 志賀賢治
 かまどや沼田大塚店
 山根孝信
 東田英明

御園生伸二
 小田昭二

■協力

文化芸社(株)
 (有)タカタ建設

2007.9.10



竹林の整備範囲を前年度より1.5倍に拡張する。大きな沼地がその中央部分に存在するため、まずは橋を架ける作業から始めた。

2007.9.11



昨年度に整備済みの区画も、一年の間に再び竹の密度が増していた。生育状態を確認し適切に間伐する。

2007.9.12



生えたまま曲げられた竹。高所にロープをかけ、滑車を使い引っ張ることで竹は大きな弧を描いていった。

2007.9.12



次々と竹を曲げる。縦の直線に支配された竹林の中において、この大胆な曲線はその場に躍動感を生む。枝葉を残してあるのは竹を枯らさないため。

2009.9.13



細く割った竹を使った作品制作。星形に編み込み、数人掛かりで曲げて大きな竹籠を作る。専攻や国籍を越えて協力している。

2007.9.14



大きく曲げた竹は「大塚かぐや姫レジデンス」の構造体になる。これに屋根を架けていく。高所での作業のため、細心の注意を払う必要がある。

2007.9.15



間伐が進むと同時に竹林内をめぐる通路を整備する必要がでてきた。山道の雑草を刈り、展示空間として相応しくなるよう整備した。

2007.9.17



今回は前年度と違い、整備した空間がそのまま作品展示の場となる。そのため、空間そのものの特徴を利用できるかどうかが鍵になる。

2007.9.18



竹という慣れない素材を扱うにあたって、それに精通した本職の方々知識は重要である。会期を通してお世話になった、田中孝雄さん。

2007.9.19



曲げた竹の1本が折れてしまい、修復している。竹は他の彫刻素材に比べ、多少失敗があっても融通が利きやすいという利点がある。

2007.9.20



「東向きの風」制作風景。建物の三階程度の位置に足場がある。直立した竹の枝葉に届くほどの高さからは見通しの良くなった竹林が一望できる。

2007.9.21



留学生ヤスミン・フルストによる「船尾」制作風景。ドイツに竹は生えていないのだという。未知の素材に対して各々のイメージを形にしていく。

2007.9.22



昨年度に引き続き、長井稔さんによる講演会が開かれた。今回のテーマは里山の利用と素材として見た竹の活用方法について。

2007.9.22



講演の中で紹介されたベニカマキリを発見する。竹の中で越冬し、対アレルギー薬の素材として研究されている。里山の仕組みに生きる生物の一つ。

2007.9.24



命綱を付けながらの屋根葺きが完了。半割にした竹を交互に重ね合わせることで、雨漏りを防ぎスムーズに水を排出する機能を持つ。

2007.9.25



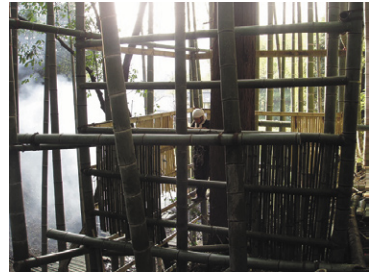
「小道のスケッチ」はマライケ・ドロブニ制作の竹による空中回廊。長大な土台に対して、一本ずつ竹を結び付けて足場を伸ばしていく。

2007.9.26



「おいわい」制作風景。竹の裏側にアクリル絵の具で着色する。竹本来の色とはまた違った見え方になり、新鮮な印象を受ける。

2007.9.27



「TAKE cover」は檜の周りを文字通り囲う、竹の屏風。日本の伝統的垣根を学びながらデザインを考える。枝の太さを選び、市松模様仕立てている。

2007.9.28



地元メディアのアナウンサーが学生にインタビュー。このプロジェクトに関して、テレビ、新聞、ラジオなどで多くの報道を通して広く社会に発信することができた。

2007.9.29



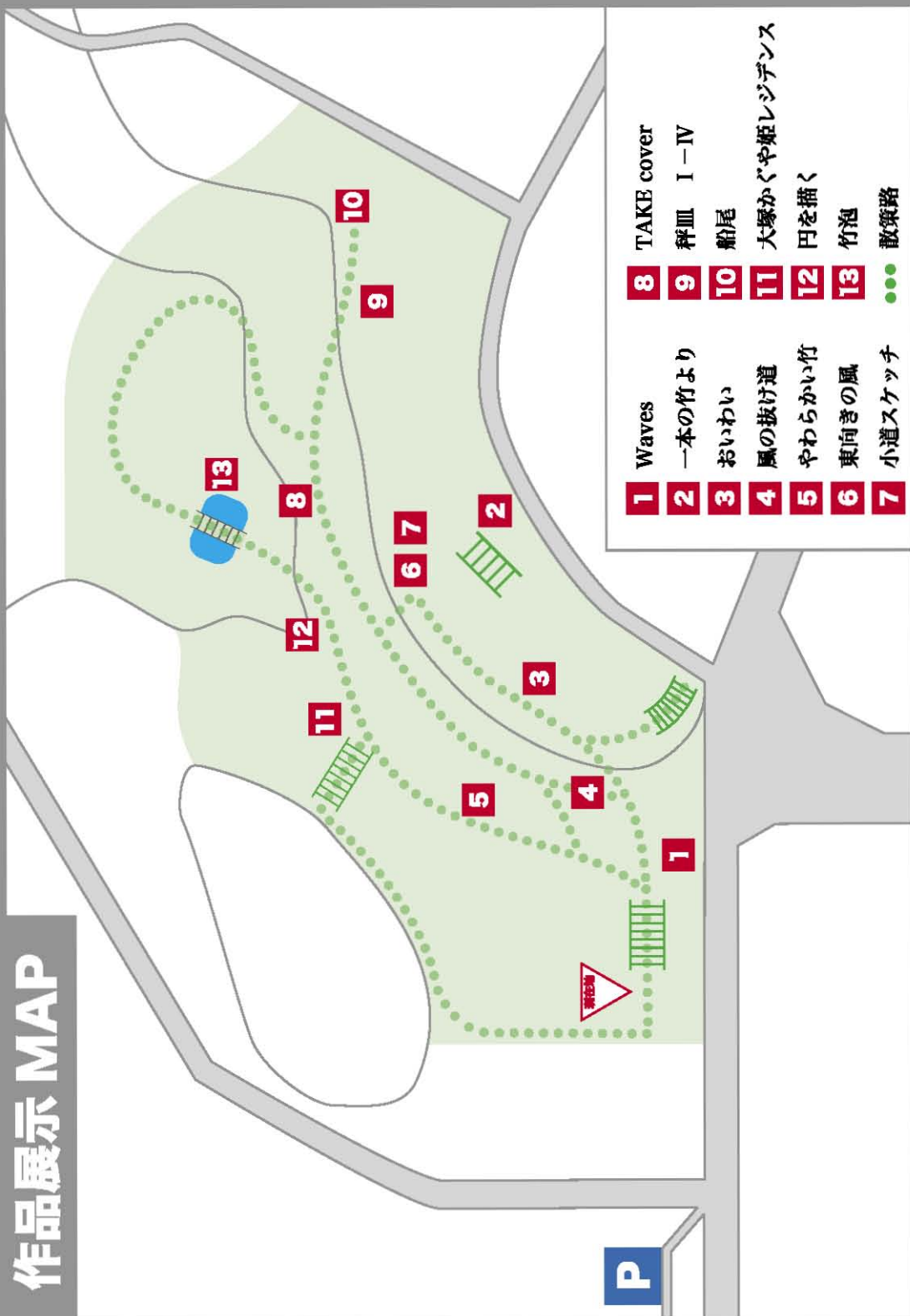
完成間近の竹の螺旋階段。経験を積むごとに階段も美しいフォルムを持ち、芸術作品へと昇華されていく。

2007.9.30



竹林の手前から奥まで一通り間伐することができた。竹と竹の間から大学と反対側にはビックアーチスタジアムが見える。

作品展示 MAP





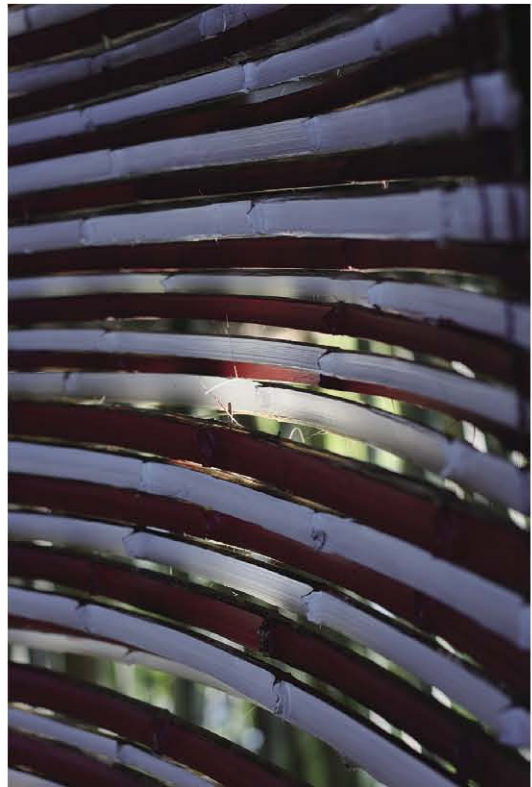
1 Waves

制作 吉田幸弘 (芸術学部准教授/立体造形)
協力 松前美保 (芸術学部非常勤助教/立体造形)
和気琢哉 (立体造形 修士2年)



2 一本の竹より

制作 田中孝雄（佐伯区在住）



3 おいわい

制作 黒田大祐 (彫刻 4年)
七搦綾乃 (彫刻 3年)
豊嶋春香 (彫刻 4年)

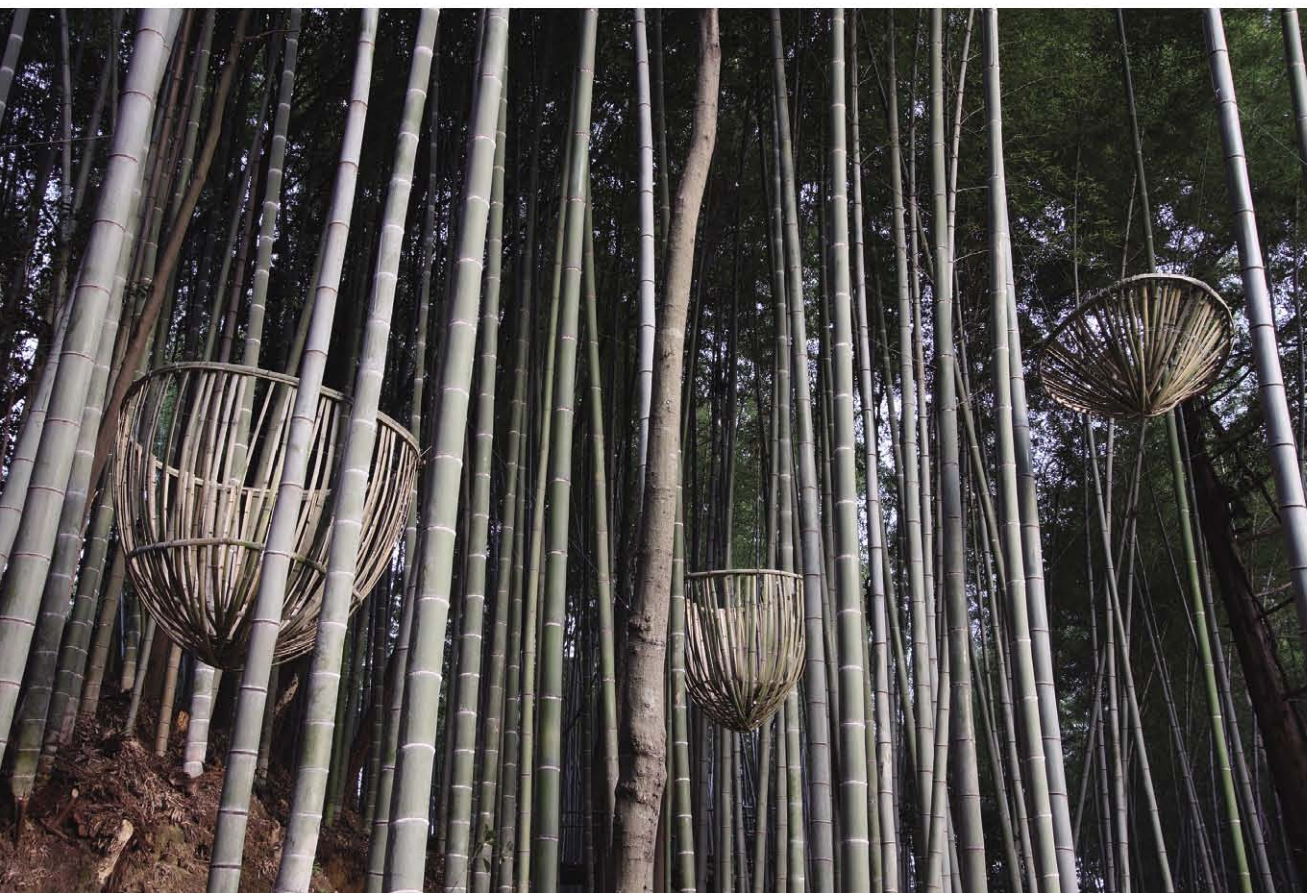


4 風の抜け道

制作 福島静佳 (彫刻 2年)

協力 大塚寛子 (彫刻 2年)

工藤理瑛 (彫刻 2年)



5 秤皿 1-IV

制作 インドラ・M・ヘン（アラヌス大学／ドイツ）

協力 三坂優（油絵 2年）

堀宗佐（情報科学部 2年）



6 やわらかい竹

制作 天野祐希（彫刻 2年）

協力 大塚寛子（彫刻 2年）

堀宗佐（情報科学部 2年）



7 東向き風の

制作 土居大祐（彫刻 3年）
山田亜以（彫刻 3年）
協力 黒崎泰広（油絵 2年）
三坂優（油絵 2年）



8 小道のスケッチ

制作 マライケ・ドロブニ (アラヌス大学/ドイツ)
協力 都野夏未 (漆造形 2年)
一田萌里 (漆造形 2年)
土居大祐 (彫刻 3年)



9 TAKE cover

制作 藤江竜太郎 (金属造形 非常勤助教)

協力 チョ・ヒヨンス (大邱カトリック大学/韓国)



10 船尾

制作 ヤスミン・フルスト (アラヌス大学/ドイツ)

協力 三坂優 (油絵 2年)

堀宗佐 (情報科学部 2年)



11 大塚かぐや姫レジデンス

制作 秋山隆（芸術学部助教／彫刻）
土井満治（彫刻 博士3年）
野原邦彦（芸術学部非常勤助教／彫刻）
前川義春（芸術学部教授／彫刻）
田中孝雄（佐伯区在住）
三上賢治（彫刻 修士2年）

協力 三宅良子（彫刻 修士2年）
河原佑貴子（彫刻 修士1年）
久保寛子（彫刻 3年）
小西寛之（彫刻 3年）
木村東吾（東広島市在住）





12 円を描く

- 制作 小早川瀬奈（彫刻 2年）
協力 都野夏未（漆造形 2年）
前西麻里絵（金属造形 2年）
大塚寛子（彫刻 2年）
衣笠雄範（染織造形 2年）



13 竹泡

- 制作 石本史織 (立体造形 3年)
片本えりか (立体造形 3年)
伊東志織 (立体造形 3年)
加藤彰訓 (立体造形 3年)
稲津あや子 (立体造形 3年)
上野晃宏 (立体造形 3年)
- 協力 松前美保 (芸術学部非常勤助教 / 立体造形)



竹の螺旋階段

制作 土井満治 (彫刻 博士3年)
三宅良子 (彫刻 修士2年)



竹の大階段

制作 土井満治 (彫刻 博士3年)
三宅良子 (彫刻 修士2年)
協力 関村誠 (芸術学研究科教授/美学)



竹階段

制作 三宅良子 (彫刻 修士2年)
土居大祐 (彫刻 3年)



竹の長椅子

制作 前川義春（芸術学部教授／彫刻）



かわや

制作 インドラ・M・ヘン（アラヌス大学／ドイツ）
マライケ・ドロブニ（アラヌス大学／ドイツ）
ヤスミン・フルスト（アラヌス大学／ドイツ）



ブランコ

制作 ヤスミン・フルスト（アラヌス大学／ドイツ）

2007.10.6

竹林ライトアップ・地域交流会

1500本の竹の切り株を利用してキャンドルを仕込み、竹林全体をライトアップした。同じ展示会場でも昼間とはまるで違う表情を見せ、竹林は幻想的な空間へと変化した。

合わせて、地域交流会と称して簡単な料理を用意して地域の方々を迎え入れた。広報や新聞記事の掲載などもあり、100人以上の来場を数えることができた。

また、篠笛奏者の梶川純司氏を招き、作品「大塚かぐや姫レジデンス」をステージに演奏会を開いた。ほのかに明るい竹林に響き渡る篠笛の音色は来場者を幽玄の世界へと誘うものだった。





篠笛演奏 梶川純司



2008

9. 8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20 — 関連講演会
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30 — 竹林整備・公開作品制作

10. 1
2
3
4 — 竹林ライトアップ・地域交流会
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19 — 作品展示

竹林整備記録

参加者名簿

<p>■地域</p> <p>田中孝雄 (佐伯区在住)</p> <p>上瀧真佐子 (東区在住)</p> <p>梶山正治 (安佐南区在住)</p> <p>茂木辰雄 (安佐南区在住)</p> <p>杉本和昭 (安佐南区在住)</p> <p>出張良二 (安佐南区在住)</p> <p>松本直真 (安佐北区在住)</p> <p>谷平英俊</p> <p>(プロジェクト代表、安佐南区在住)</p> <p>山根孝信</p> <p>(プロジェクト委員、安佐南区在住)</p> <p>皆川勉</p> <p>(西風新都整備部、安佐南区在住)</p> <p>大島将宏 (彫刻卒業生、安佐南区在住)</p> <p>永田浩代 (彫刻卒業生、西区在住)</p> <p>和田拓治朗</p> <p>(彫刻卒業生、安佐南区在住)</p> <p>藤江竜太郎</p> <p>(金属造形卒業生、安佐南区在住)</p> <p>■学生</p> <p>三上賢治 (彫刻 博士1年)</p> <p>三宅良子 (彫刻 研究生)</p> <p>楠直明 (彫刻 研究生)</p> <p>河原佑貴子 (彫刻 修士2年)</p>	<p>黒田大祐 (彫刻 修士1年)</p> <p>豊嶋春香 (彫刻 修士1年)</p> <p>小田拓也 (彫刻 修士1年)</p> <p>竹岡亜依 (漆造形 修士1年)</p> <p>舛岡真伊 (漆造形 修士1年)</p> <p>神田繁輝 (立体造形 修士1年)</p> <p>土居大祐 (彫刻 4年)</p> <p>池田美和子 (彫刻 4年)</p> <p>落合真美 (彫刻 4年)</p> <p>小野愛 (彫刻 3年)</p> <p>工藤理瑛 (彫刻 3年)</p> <p>小早川瀬奈 (彫刻 3年)</p> <p>福島静佳 (彫刻 3年)</p> <p>黒崎泰広 (油絵 3年)</p> <p>衣笠雄範 (染織造形 3年)</p> <p>松本桂 (立体造形 3年)</p> <p>都野夏未 (漆造形 3年)</p> <p>檜山紗世 (漆造形 3年)</p> <p>岡野佳世子 (彫刻 2年)</p> <p>中根弘人 (彫刻 2年)</p> <p>西尾愛 (彫刻 2年)</p> <p>山川真紀 (彫刻 2年)</p> <p>城間美里 (漆造形 2年)</p> <p>近友円 (漆造形 2年)</p> <p>山口菜央 (漆造形 2年)</p> <p>清水香織 (漆造形 2年)</p>	<p>浅野真里 (彫刻 1年)</p> <p>岡野菜穂 (彫刻 1年)</p> <p>川西智尋 (彫刻 1年)</p> <p>園田昂史 (彫刻 1年)</p> <p>友定陸 (彫刻 1年)</p> <p>米田章 (彫刻 1年)</p> <p>片島蘭 (デザイン工芸 1年)</p> <p>今給黎佳奈 (油絵 1年)</p> <p>森下恭介 (日本画 1年)</p> <p>■留学生</p> <p>マライケ・ドロブニ</p> <p>(アラヌス大学/ドイツ)</p> <p>ステファン・パリソ</p> <p>(元/ハノーバー専科大学/ドイツ)</p> <p>アンドレイ・シャフトシナイダー</p> <p>(ハノーバー専科大学/ドイツ)</p> <p>■教員</p> <p>藤原信</p> <p>(元/ハノーバー専科大学教授/彫刻)</p> <p>浅田尚紀</p> <p>(広島市立大学学長/情報学部)</p> <p>中島正博 (国際学部教授/環境管理論)</p> <p>前川義春 (芸術学部教授/彫刻)</p> <p>南昌伸 (芸術学部教授/金属造形)</p>	<p>吉田幸弘 (芸術学部准教授/立体造形)</p> <p>大塚智嗣 (芸術学部准教授/漆造形)</p> <p>関村誠 (芸術学研究科教授/美学)</p> <p>梶原正朗 (芸術学部助教/彫刻)</p> <p>秋山隆 (芸術学部助教/彫刻)</p> <p>竹内雅人 (芸術学部非常勤助教/彫刻)</p> <p>土井満治 (芸術学部非常勤助教/彫刻)</p> <p>和気琢哉</p> <p>(芸術学部非常勤助教/立体造形)</p> <p>橋本庄一</p> <p>(芸術学部非常勤助教/金属造形)</p> <p>■差し入れお礼</p> <p>上瀧真佐子 岡真由美</p> <p>沖村義春 池田美和子</p> <p>片山登 上池涉</p> <p>熊本雪夫 垣東大介</p> <p>谷平英俊 竹澤雄三</p> <p>松本敏夫 田中孝雄</p> <p>志賀賢治</p> <p>かまどや沼田大塚店</p> <p>■協力</p> <p>文化工芸社 (株)</p> <p>(有) タカタ建設</p>
---	--	--	---

2008.7.18



大塚かぐや姫プロジェクトも3年目を迎えるにあたり、より多くの参加者を募るため、地元住民を交えた説明会を開く。活発に意見交換が行われた。

2008.9.8



今回はさらに整備区画を拡張、前年までと合わせて1ヘクタールを間伐する。効率よく作業を行えるように手順を確認する参加者たち。

2008.9.9



竹に加えて細った木も間伐する。過剰に生い茂る竹は他の植物の生育をも阻害するため、定期的な手入れが必要とされる。

2008.9.10



山の日陰側の竹は生育状態の生育状態の悪く、枯れたものも多い。それらから優先して間伐することで、竹林を健全なものへと変えていく。

2008.9.10



浅田尚紀学長が竹林整備に駆けつける。学生や教員、地域の方々とともに汗を流し、プロジェクトの一員として参加していただいた。

2008.9.12



新規整備区画最奥の沼地に橋を架ける。切り倒した竹と地面から生えている竹を交差させた土台に、足場を敷き詰めていく。

2008.9.13



参加人数は過去最大を数える。幅広い専攻から参加した学生達が、その垣根を越えて竹林整備や作品制作に没頭していった。

2008.9.15



この日は朝から雨が降り続いた。大塚かぐや姫レジデンスの下で雨宿りをしながらの食事。こうして参加者が交流を深めていくことにも大きな意義がある。

2008.9.16



前年度に架けた橋の老朽化が進んでいた。架け替えるために長さや太さが近い竹を数本用意、仮設置して完成形をイメージする。

2008.9.17



竹の固定には、環境サイクルの観点から、鉄の針金ではなくシュロ縄を主に使った。その結び方について指導を受ける学生。

2008.9.18



強弱を付けて曲げられた竹の群は、進む水しぶきを連想させる。数十本の竹全てに対して、ロープをかけ、曲げるという行程を繰り返す。

2008.9.19



カリカリと小気味良い音を立てながら割れる竹。切った後に数日乾かしておけば、水分が抜けて刃物が通りやすくなり、作業性が向上する。

2008.9.20



大塚集会所にて、国際学部の中島正博教授と、藤原信客員教授による講演会。前者／豊岡の実例をふまえた里山のあり方、後者／作家としての竹や石に対する取り組み方について。

2008.9.22



鎌を使って竹を細く割く妙技を見せる田中孝雄さん。その繊細な技術に、普段からものづくりに携わる教員や学生も目を離せなかった。

2008.9.23



近隣の家族が子供連れで来場、設置されたブランコで遊んでいる。整備されるまでこの竹林は「ママシ谷」と呼ばれ近付くこともない場所であったが、今ではこの通り。

2008.9.24



「TRACE」制作風景。薄く割いた竹を縦横に編み込んで、巨大な網を作っている。竹のしなやかさを活用した作品。

2008.9.25



音響作品「Bambus Bach - 竹音 -」制作風景。生えたままの4本の竹にスピーカーユニットを埋め込み、タイムドメイン方式を成立させている。使用曲はBach(バッハ)のオーケストラ曲。

2008.9.26



「滝見茶屋」は大きな沼の上に架かっている。落ち葉や切った竹の破片を取り除くと大量の泥土があることが分かり、安全を考慮して取り除く。

2008.9.27



数週間、自然に囲まれながら制作活動を行う内に、そのふとした美しさに対する感覚が鋭くなっていくのが分かる。人が生きる上で忘れてはいけないものだと感じた。

2008.9.29



禅寺の住職のように竹やぶを掃き清める。日本の美の原点がそこにある。来場者を迎え入れる体制が着々と整っていく。

2008.9.30



整備最終日は生憎の雨。作品の仕上げに追い込みをかけている。いよいよ翌日から竹林は一般公開、展示会の会場となる。

大塚かぐや姫 プロジェクト 会場 MAP

- | | | | |
|---|--------------------|---|---------|
| ① | もうひとりかぐや | ⑩ | TRACE |
| ② | 〇〇∞〇〇∞ | ⑪ | 帰命 |
| ③ | 1/8g | ⑫ | トッピング |
| ④ | himmeli - 竹 - | ⑬ | 遊歩道 |
| ⑤ | 広島安佐南区の土俵 | ⑭ | 滝見茶屋 |
| ⑥ | 波 | ⑮ | 名勝 大塚大滝 |
| ⑦ | Bambus Bach - 竹音 - | ⑯ | 竹の木 |
| ⑧ | mist | ⑰ | やくそく |
| ⑨ | 築島 | | ... 散策路 |





① もうひとりかぐや

制作 神田繁樹（立体造形 修士1年）



2 ○○○∞○○○∞

制作 福島静佳 (彫刻 3年)
協力 亀井歩 (金属造形 3年)
小野愛 (彫刻 3年)



3 1/8g

制作 河原佑貴子 (彫刻 修士2年)

豊嶋春香 (彫刻 修士1年)

丸橋光生 (彫刻 修士1年)



④ himmeli - 竹 -

制作 工藤理瑛 (彫刻 3年)

協力 小野愛 (彫刻 3年)



⑤ 広島安佐南区の土俵

制作 黒田大祐（彫刻 修士1年）
小田拓也（彫刻 修士1年）
岡田佳世子（彫刻 2年）
西尾愛（彫刻 2年）



6 波

- 制作 川西智尋（彫刻 1年）
園田昂史（彫刻 1年）
友定睦（彫刻 1年）
浅野真理（彫刻 1年）
岡野菜穂（彫刻 1年）
片島蘭（デザイン工芸 1年）
今給黎佳奈（油絵 1年）
森下恭介（日本画 1年）



⑦ Bambus Bach - 竹音 -

制作 吉田幸弘 (芸術学部准教授 / 立体造形)



⑧ mist

制作 三上賢治 (彫刻 博士1年)



9 築島

制作 竹内雅人 (芸術学部非常勤助教/彫刻)

協力 梶原正朗 (芸術学部助教/彫刻)

土居大祐 (彫刻 4年)

三宅良子 (彫刻 研究生)

楠直明 (彫刻 研究生)



10 TRACE

制作 三宅良子（彫刻 研究生）

協力 梶原正朗（芸術学部助教／彫刻）

土居大祐（彫刻 4年）



11 帰命

制作 黒崎泰広 (油絵 3年)



12 トッピング

制作 三宅良子 (彫刻 研究生)



13 遊歩道

制作 土井満治（芸術学部非常勤助教／彫刻）
楠直明（彫刻 研究生）





14 滝見茶屋

制作 藤原信 (元ハノーバー専科大学教授/彫刻)
南昌伸 (芸術学部教授/金属造形)
田中孝雄 (佐伯区在住)



15 名勝 大塚大滝

制作 前川義春（芸術学部教授／彫刻）
土井満治（芸術学部非常勤助教／彫刻）
梶原正朗（芸術学部助教／彫刻）
竹内雅人（芸術学部非常勤助教／彫刻）
楠直明（彫刻 研究生）
三上賢治（彫刻 博士1年）
三宅良子（彫刻 研究生）
和気琢哉（芸術学部非常勤助教／立体造形）

土居大祐（彫刻 4年）
小田拓也（彫刻 修士1年）
川西智尋（彫刻 1年）
園田昂史（彫刻 1年）
友定睦（彫刻 1年）
浅野真里（彫刻 1年）
片島蘭（デザイン工学 1年）



16 竹の木

制作 ステファン・バリン (元ハノーバー専科大学/ドイツ)



17 やくそく

制作 マライケ・ドロブニ (アラヌス大学/ドイツ)



漆塗り竹箸／漆塗り竹フォーク／漆塗り竹小皿



拭き漆竹皿



変わり塗り竹皿

制作 大塚智嗣 (芸術学部准教授／漆造形)
 竹岡亜依 (漆造形 修士1年)
 舛岡真伊 (漆造形 修士1年)
 都野夏未 (漆造形 3年)
 檜山紗世 (漆造形 3年)

城間美里 (漆造形 2年)
 近友円 (漆造形 2年)
 山口奈央 (漆造形 2年)
 清水香織 (漆造形 2年)



青竹階段

制作 土井満治（芸術学部非常勤助教／彫刻）
楠直明（彫刻 研究生）



竹の渡り橋

制作 土居大祐（彫刻 4年） 協力 小西寛之（彫刻 4年）
森下恭介（日本画 1年）



竹扇

制作 和气琢哉（芸術学部非常勤助教／立体造形）



竹林展示会場



左：「竹の木」 中央：「名勝 大塚大滝」 右：「滝見茶屋」

2008.10.4

竹林ライトアップ・地域交流会

3年間で間伐した竹、合計2600本の切り株にキャンドルを入れて、竹林全体をライトアップ。距離感が揺らぐほど奥の方まで続く光の道は、実に広い範囲を整備したのだと実感させるものだった。

前年を上回る数百人の来場者に、漆の器を使った軽食を提供した。これらは学生と教員の手作りである。

また、ソプラノ歌手二名と、広島市立大学電子音楽部の学生、白木竹筒スピーカー工場の松本さんらがステージを盛り上げ、3年間にわたる大塚かぐや姫プロジェクトの締めめに相応しい交流会となった。





広島市立大学電子音楽部演奏



ソプラノ演奏

- ・前川ひとみ (ソプラノ)
- ・森脇千絵 (ソプラノ)
- ・大野陽子 (ピアノ伴奏)

報道記録（記事切り抜きのためインターネット非公開）

中国新聞 2006年9月21日 28面

地域輝け「竹取」作業 安佐南区沼田 市立大生らかぐや姫プロジェクト 京の風情へ30人汗

中国新聞 2007年9月11日 27面

竹取アート やぶに光を 安佐南区で竹筒作品プロジェクト

中国新聞 2007年10月3日 28面

竹取アート in 大塚 広島市立大生「憩い空間」

Wie schön anders doch alles hier ist

Studentinnen der Alanus Hochschule berichten von ihrem Austauschjahr in Japan

Seit acht Monaten sind Indra Henn, Nora Mertes und Jasmin Hurst nun schon in Japan. Mareike Drobny hat vor vier Monaten den Schritt gewagt. Die Kunststudentinnen der Alanus Hochschule nehmen an einem Austauschprogramm mit der Hiroshima City University teil, einer der weltweit siebzehn Partneruniversitäten der Kunsthochschule aus Alter. Die Eindrücke, die sie bei ihrem Aufenthalt in dem kulturell und sprachlich fremden sowie oft rätselhaften Land gesammelt haben, schildern sie hier verdichtet zu einem exemplarischen Tagesablauf.

7.15 Uhr Draußen heult eine Lautsprecherdurchsage unterstützt von einer netten Musik. Ich wälze mich auf meinem geblümten Futon auf die nach Stroh riechende Tatamimatte. Schlaftrunken schlüpfte ich in meine Hausschlappen, eine Springspinne kreuzt meinen Weg. Beim Öffnen der Tür steigt mir ein Duft von frisch gekochtem Reis in die Nase. Ich wechsle in die Toilettenschuhe und betrete das WC. Der Klodeckel öffnet sich automatisch, so dass ich mich nur noch auf die behäuzte Klobrille niederlassen muss. Eine Bandbreite von Knöpfen und technischen Raffinessen steht mir zur Verfügung. Dann, nach der mir zustehenden Zeit, setzt sich wieder automatisch die Spülung in Gang.

An dem Tisch, nicht weit über dem Boden, nehme ich mein Frühstück ein. Misosuppe mit dem Reis aus dem Reiskocher. Mir gegenüber sitzt mein japanischer Mitbewohner, er bereitet mit einer wunderbaren Ruhe seinen grünen Tee zu. Ich habe schon die nächsten Dinge im Kopf, die noch erledigt werden müssen und werde mit einem freundlichen „Itta rashal - komm bald wieder“ verabschiedet.

8.00 Uhr Ich stramble den steilen Berg auf meinem Rad hinauf. An einer Kreuzung überquert eine Gruppe von kleinen, kichernden, in Matrosen-Uniform gekleideten Schulkindern die Straße und schaut mich mit großen Augen an. Ich fahre weiter, vorbei an noch im kräftigen Grün stehenden Reisfeldern, an bunt gefärbten Ahornbäumen, an mit Kaki beladenen Fruchtbäumen und an Bauern, die mit ihren großen Strohütten und den weißen Kopftüchern mit blauen und roten Punkten in gebückter Haltung bei der Reisernte zu entdecken sind.

9.00 Uhr Ankunft an der Uni. Freundliche Begrüßungen, Verbeugungen, aber auch verschämte, mir unsicher begegnende Blicke. Lange Gänge, rechts und links Türen, Atelier an Atelier. Aus den perfekt ausgestatteten Werkstätten schal-

len schon Arbeitsgeräusche. Mit einem enormen Perfektionismus wird Kupfer getrieben, werden Steinportraits gehauen oder ähnliche klassische Arbeitsweisen erlernt. An dieser Uni werden dem traditionellen Kunsthandwerk und der ästhetischen Gestaltung viel Aufmerksamkeit geschenkt. Emsig arbeitende Studenten, die weiße Handtücher oder traditionelle farbenfrohe Tücher um den Hals oder Kopf gebunden

haben, arbeiten in einer mir ungewohnten Haltung auf dem Boden.

12.10 Uhr Mittagspause. Die Studenten gehen in Richtung Mensa, um Mittag zu essen. Andere brühen sich ihr Fertigergericht auf und schlürfen die Udon-Nudelsuppe mit Hilfe ihrer Stäbchen. Auf Bänken liegen schlafende, zusammengewollte, grazile Körper mit kohlschwarzem, glänzendem Haar. Dann ertönt die wohlklingende



Stundenglocke und wie von Geisterhand richten sich die Ruhenden auf und bewegen sich mit den aus jeder erdenklichen Ecke strömenden Studenten wieder in die Werkstätten oder Vorlesungen.

13.00 Uhr Vorlesung. Ich finde den Raum nicht und spreche eine Mitsudentin an. Sofort versammelt sich eine Traube von hilfsbereiten Japanern um mich, die mich auch sogleich bis zum Vorlesungssaal begleiten. Ein Murren und Raunen gehen durch den Raum. Der verehrte und umworbene Sensai erscheint. Ich verfolge den Unterricht und lausche den fremden Klängen. Mir ist bewusst, welch eine Chance es für mich darstellt, nach Japan gekommen zu sein. Jeder Tag bringt neue Herausforderungen und Bilder. Die Reibung, die aus meiner eigenen Herkunft und der Fremde resultiert, birgt ein großes Potential für das künstlerische Schaffen.

Immer wieder streift mein Blick durch die Reihen der Anwesenden. Einige schlummern ganz selbstverständlich. Das Schlafen innerhalb der Vorlesung scheint hier keineswegs verrufen zu sein, sondern eher ein Anzeichen dafür, dass der Student fleißig gearbeitet hat und nun erschöpft ist. Immerhin ist er anwesend.

17.00 Uhr Heute verlasse ich die Universität schon früher als gewöhnlich, da ich mich mit Freunden in der Stadt verabredet habe. Ich nehme einmal zu bemerken, dass sich die Tür so nicht öffnen lässt. Wie schön anders doch alles hier in Japan ist!

23.30 Uhr Erschöpft trete ich den Nachhauseweg an. Zu Hause angekommen ereignet sich wie jeden Tag dasselbe Spiel: Ich stecke meinen Haustürschlüssel ins Schloss und drehe nach rechts, um wieder einmal zu bemerken, dass sich die Tür so nicht öffnen lässt. Wie schön anders doch alles hier in Japan ist!

immer wieder von Bambuswäldern und Reisfeldern unterbrochen werden. Nach ca. 20 Minuten komme ich in Hiroshima an. Ich kaufe mir noch schnell ein Getränk an einem bunt blinkenden Automaten und erledige Besorgungen in einem Supermarkt. Von überall her tönt mir ein freundliches „irasshaimas - willkommen!“ entgegen. Ich laufe durch die bunten Warangänge und bin umgeben von fremdartigen Produkten, die es mir schwer machen, von der Verpackung auf den Inhalt zu schließen. Schließlich bin ich an der Kasse angekommen. Bei jedem einzelnen Produkt zwitschert die Kassiererin den entsprechenden Preis und packt mir meine Einkäufe sorgfältig ein. Stetig bedankt sie sich verbeugend für meinen Einkauf - ganz nach dem Prinzip „der Kunde ist König“. Wieder fällt mir auf, dass gesellschaftliche Positionen und Hierarchien in Japan bewusst gelebt werden.

Nach einem kleinen Gang durch einen der schön angelegten Parks treffe ich mich mit Mitsudenten in einem Esakaya. Wir betreten das Restaurant, in dem wir einen Vorhang zur Seite schlagen und unsere Schuhe am Eingang zurücklassen. Einen Schritt auf das Podest hinauf und dann setzen wir uns in einem Schneidersitz auf Kissen, gebettet um den langen tiefen Tisch herum. Auf an der Wand hängenden Holztäfelchen stehen in schwarzen Kanji die Köstlichkeiten des Hauses. Es wird wild durcheinander bestellt und die kleinen, schön gestalteten Keramikschalen mit kunstvoll präsentierem Essen werden herungereicht. Nachdem wir ausgiebig gespeist haben, wird die Rechnung geteilt. Meine Schuhe haben ihre Ausrichtung gewechselt und schauen nun mit der Spitze zur Tür, so dass ich problemlos in sie hineinschlüpfen kann und mich in Richtung Ausgang bewege.

Es folgt das Auftreffen auf die belebte Hondori-Einkaufsstraße. Leuchtreklamen, laute Pachinkohallen, kichernde Frauen in hochhackigen Schuhen oder im traditionellen Kimono, Männer im Anzug gekleidet, die jetzt erst das Büro verlassen haben und nun gemeinschaftlich zum Karaoke-Singen gehen, prägen das Bild. 23.30 Uhr Erschöpft trete ich den Nachhauseweg an. Zu Hause angekommen ereignet sich wie jeden Tag dasselbe Spiel: Ich stecke meinen Haustürschlüssel ins Schloss und drehe nach rechts, um wieder einmal zu bemerken, dass sich die Tür so nicht öffnen lässt. Wie schön anders doch alles hier in Japan ist!

Mareike Drobny,
Nora C. J. Mertes,
Indra Magdalena Henn,
Jasmin Hurst



Trigonal (アラヌス大学のフリーペーパー) 2008年4月

報道記録（記事切り抜きのためインターネット非公開）

中国新聞 2008年10月2日 11面

竹林アート 環境に一役 3年目迎えた「かぐや姫プロジェクト」

中国新聞夕刊 2008年10月7日 5面

アングル 大塚かぐや姫プロジェクト 広島市安佐南区

朝日新聞 2008年10月10日 31面

竹取はアート空間 広島市立大生ら整備、15日まで／広島県

"begegnung" < 出会い >

Mareike Drobny < マライケ・ドロブニ > (アラヌス大学からの交換留学生 H19.9 ~ H20.9)

Der Bambus ist eine schlanke, holzige Pflanze, oft mit meterlangen Halmen, luftigen, zierlichen Kronen und grasartigen Blättern. Er ist einzuordnen in die Familie der Gräser, allerdings in dem Ausmaß in Europa nicht zu finden.

Aber vielleicht kann man bei dem Betreten der japanischen Wälder nachempfinden, wie sich eine Ameise fühlen muss, wenn sie durch Schachtelhalmgräser hin und her krabbelt.

So wird wohl jeder fasziniert sein, von der Größe und Schönheit dieses Anblickes, wenn er zum ersten Mal mit dieser fremden Ästhetik konfrontiert ist. Denn was für einen Japaner völlig normal ist, ist für uns Europäer eine grazile und gleichzeitig mächtige Naturerscheinung, die überwältigt.

In Japan ist der Bambus ein Symbol der Ästhetik und Schönheit. Klar, reduziert und minimal. Der Umgang mit diesem, ist für jemanden der mit dieser Besonderheit nicht vertraut ist, eine einmalige Chance über die Natur eine Kultur kennen zu lernen.

Dieser außergewöhnliche Zugang, durch die Mitarbeit bei dem Ozuga-Kaguhime-Projekt, ergab eine einmalige Gelegenheit in die japanische Kultur und Tradition einzutauchen.

Zum einen durch die Arbeit des Einzelnen, aber auch durch die generationsübergreifende Zusammenarbeit entstand eine Basis der besonderen kulturellen Begegnung. Künstlerische Ideen wurden mit alten traditionellen japanischen Techniken umgesetzt und in ein Projekt getragen, das die scheinbar gegensätzlichen Pole von Tradition und Neuem, Kunst, Natur und Funktionalem miteinander verbindet.

Der Baum ist das Symbol der Verwurzelung und

gleichzeitig strebt er nach oben in Richtung Himmel. Er ist wie eine Verbindungslinie von zwei Welten – die sehr gegensätzlich sind und doch im Zusammenhang miteinander stehen.

In diesem einmaligen Projekt tauchte für mich immer wieder die Frage auf, in wie weit westliche und östliche Weltanschauung miteinander vereinbar sind, oder wo sie sich bei ästhetischen Fragestellungen annähern. Denn so wie der Bambus als Verbindungslinie zwischen den Gegensätzen Himmel und Erde gesehen werden kann, kann vielleicht die Natur und Kunst ein Bindeglied in der Begegnung sein?

Der Bambus, mit seiner reduzierten kerzengeraden Form im Gegensatz zu der knorrigen und verzweigten deutschen Eiche, können in Ihrer Unterschiedlichkeit zum Symbol ihrer jeweiligen Kultur gesehen werden.

Auch wenn es natürlich schier unmöglich ist, einen Vergleich beider Kulturen anzustellen, so hat deren Begegnung, bei diesem Projekt eine außergewöhnliche Rolle gespielt.

Die unterschiedlichen Ansätze der Wahrnehmung, der Art und Weise wie ein solches Material empfunden und weiterverarbeitet wird, lassen mir die Bedeutung und große Wichtigkeit eines kulturellen Austausches, bzw. eines gemeinsamen Projektes bewusst werden.

Klar und vertikal strebt der Bambus in die Höhe, der Blick führt nach oben, in ein Blattwerk, das doch einen spürbar anderen Charakter hat, als man es in den europäischen Wäldern gewohnt ist.

Das Schattenspiel, flüstrig leicht, scheinbar ein spürbares Geräusch, eine Exotik, die wie ein himmlischer Kontakt zu dem Land der aufgehenden Sonne ist.

Es bleibt nicht mehr viel zu sagen, nur die Beschreibung

einer Geste, das Bild einer Verneigung vor einer Kultur und Ästhetik, die ich kennen lernen durfte und vor dem Bambus, der für ein unbeschreibliches Erlebnis steht.

<邦訳>

竹は、大抵の場合何メートルにもわたる茎と、かろやかで上品な樹冠、稲のような葉を持つ細長い樹木状の植物です。イネ科に属しますが、ヨーロッパではこれに相当するものは見当たりません。竹林に入りそこを歩き回ってみると、まるで蟻にでもなったかのように日本の林を体感し、きっと誰もがその美しさと偉大さに魅了されてしまうことでしょう。日本人にとっては当たり前であっても、私達ヨーロッパ人にとっては、しなやかでありながら力強い自然に心奪われてしまうのです。

日本では、竹は美と美意識の象徴であり、そぎ落とされ、ミニマリストックです。竹という自然を通してひとつの文化に触れることは、その偉大さをまだ知らぬ者にとっては、またとないチャンスと言えるでしょう。

こうして、大塚かぐや姫プロジェクトへの参加という特別な体験は、日本の文化と伝統に浸たるといふかけがえない機会となりました。それぞれの、また世代を超えた共同作業により、文化と文化が出会う基盤ができました。芸術的アイデアが、日本の古くからの伝統的な技法により実現され、一見異なる二つの極 - 伝統的なものと新しいもの、芸術や自然と機能的なもの - を結びつけるプロジェクトとなりました。

竹は、「根をはること / 根付くこと」のシンボルであり、また同時に空へと伸びてゆくものでもあります。それは、まるでまったく正反対でありながらも、関連のある二つの世界を結びつけているかの様です。

この比類なきプロジェクトにおいて、私には、絶えずある問いかけが浮かんできました。 - どの程度、西洋的、東洋的価値観は互いに調和しうるだろうか？ もしくはどのような美的な点において、近づけるのだろうか？ 竹が、天と地という対極に位置するものを結びつけると考えるならば、それは自然と芸術をも結びつけることができるのではないだろうか？ ということです。

節くれ立ち、枝を多く持つドイツのオークと、それに比べシンプルでまっすぐと伸びる竹は、互いの文化的相違のシンボルとも見受けられます。実際、お互いの文化を比較することはほとんど不可能であったとしても、この二つの文化が出会ったということは、今回のプロジェクトにおいて非常に意味のあることとなりました。物事の捉え方の違いや、素材の何に目を付け、どう制作してゆくのかということから、文化的交流、また共同のプロジェクトとしての意義を大いに感じることができました。すっきりと垂直に伸びる竹に、視線も自然と上方へ惹き付けられます。ヨーロッパの森で慣れ親しんだものとは違うもの - さわさわと軽い影のうつろい、ざわめき、そしてまるで天からこの日出ずる国への恵みのようなエキゾチックさ - がそこにはあります。

以上が、私が出会った文化と美意識、そして素晴らしい体験であった竹プロジェクトについてです。多くを語るより、ただ敬意を表するばかりです。

(マライケ ドロブニ)

大塚かぐや姫プロジェクトを終えて

河原佑貴子（広島市立大学大学院芸術学研究科彫刻専攻2年）

まだ暑さの残る9月、「大塚かぐや姫プロジェクト」が今年も開催された。

このプロジェクトは荒れた竹林を整備することから始まり、整備によって切り出された竹を素材とし、芸術作品を作りあげるという企画で、今年で三年目を迎える。

大塚かぐや姫プロジェクトを通し、私達は制作に携わる上での「経験としての方法論」を学んだのではないのだろうか。このプロジェクトにおけるキーワードは、「発想を転換」することである。制作においても、使い慣れない素材を扱い上手く行かない事も出てくるだろう。そのなかで私達はどうするべきかを考えざるをえない。三週間という限られた時間のなかで、私達は成功に導くための失敗や状況的变化に対し、リアリティーをもって学ぶのである。いってしまえば「大塚かぐや姫プロジェクト」自体、発想を転換させる事によって生まれたプロジェクトと考える事が出来るだろう。

このプロジェクトは2005年に行われた「KHOLA(コーラー)」というプロジェクトを契機とする。これはドイツのニュルンベルク大学と「日独国際間共同プロジェクト」という目的で行われ、日本とドイツという国を超え、両国相互的に開催されたプロジェクトである。とはいっても、作品を作る為にはまず材料を調達しなければならない。金銭的余裕がある訳でもないそんな時、大学の近くに濛々と生えていながらも誰も目に留めることのなかった竹という存在があったのだ。つまり、「ない」という状況から「生み出す」というプロセスは発想を転換させることによって生まれるのではないのだろうか。

そして、私達は竹林を整備するという事により「場」、「空間」という問題に突き当たる。普段の制作や展示において私達は「場」であったり、「空間」というものを意識し、それらは作品のコンセプトの一部である場合やどのように作品を見せるのかという目的の上、「都合の良い場」を選ぶ。

しかし、作品を作り設置するという意気揚々とした気持ちであっても、そこにはアトリエの様なひらけた場所も、見渡しの良い風景も、ギャラリーの様なホワイトキューブ等用意されているはずもなく、整備を行わない限り作る場所も設置する場所も見当たらないのである。

他のプロジェクトとの異なる点として、すでに「風景」として存在している場所に作品を置くということは不可能なのである。つまり、あるべきはずの「場」、「空間」がないという状態でのスタートなのだ。しかし、私達の仕事は「無い」ことを嘆くことではない。「無い」という状況をどうするかを考えることである。難しい問題の時程答えは至ってシンプルな場合が多いのだ。つまり作るのである。

私達は「竹林を整備する」という一見なら芸術に関係の無い行為において、「場」をつくるという芸術においての本質的な試みが出来た様に思う。ただ汗をかきひたすら竹を切った後、私達を取り巻く景色は一変していた。目の前には清々しい竹林が広がる「風景」があったのだ。竹林内に設置された作品群は「竹林」という風景の一部となり、私達は竹林整備、または立体造形制作という三次元のアプローチを通し、風景を描くという事が実現出来たのではないのだろうか。

作品を作り発表するという結果としての目標は一つであっても、そこに行き着くルートは必ずしも一つではない。今回の「大塚かぐや姫プロジェクト」を通し、私達はすでにあるものを当たり前のもとして見るのではなく、もう一度異なった角度から考えていく事の重要性を改めて知る事が出来た様に思う。

そこにはプロジェクトとしての個性となるものが確かに存在し、それらはプロジェクトにおける意義に繋がっていくのではないのだろうか。

(ごうばら ゆきこ)

中島正博 (広島市立大学国際学部教授)

1. 人と自然の関係の再構築を模索

環境問題が人びとに意識されるようになったのは1960年代頃からである。人間の活動が自然や環境にダメージを与えたことを自覚し、その反動で私たちは自然とどのような関係を結ぶべきか模索している。人間が森林を伐採する「自然破壊」は悪いこと、人間が自然に「手を加える」のは良くないことと考え、「手つかず」の原生的自然が「理想」の存在であると思う人は多い。しかしそれは人間と自然の「分断」である。人間は自然を利用せずに生きられない。そこで「手つかず」が理想ではあるが、生きるために自然を犠牲にする現実を目をつむるといふ、理想と現実の矛盾から生まれる諦観を現代人は抱いているのではない。

そこに大きな危険が潜んでいる。なぜなら、その諦観は自然の保全や保護に対する諦観にも繋がるからだ。「環境を守らなければ」という意識はありながらも、私たちは環境に配慮した行動を怠りがちである。この意識と行動の乖離の背後にはさまざまな原因があるが、その一つに先の諦観が働いているように思う。

もしそうだとするならば、私たちを諦観に導いた考えを疑う必要がある。それは「手つかず」を理想とする考えである。人間が自然を支配しようとして破壊してしまった罪悪感から、時計の振り子がゆれるような、支配から分断（手つかず）へと向かう心的傾向は無理もないが、それは単純に過ぎる。人間は自然を利用して生きる事実を正視し、それがゆえに現実には不可能な分断に向かうのではなく、人間と自然の関係を再考し再構築するという、忍耐を要する文明的な課題に取り組まなければならない。

分断と諦観に向かう人びとの心的傾向に関わらず、私たちが地球上に生きるために、人間と自然の関係を再構築する模索は行われている。自然保護もその一つである。

自然の支配ではなく、私たちは共存や共生を志向している。そしてその共生の内実を模索している。たとえば、ある人は農業や林業の害獣と見なし、ある人は絶滅危惧種と見なす熊も、人間との関係が問われている。単純な発想で実際には不可能な分断ではなく、人間と自然の関係の再構築という課題に取り組むとき、何が自然保護で何が自然破壊か、自明の解答が存在しない困難な道を、私たちは歩まなければならない。

そのような模索の中から未来への希望も見える。日本で絶滅したコウノトリが兵庫県豊岡市で野生復帰への試みに成功しつつある事実（2007年）、そして同様に絶滅したトキが新潟県佐渡島で野生復帰への一歩を踏み出した事実（2008年）などである。そこではコウノトリやトキと共存・共生できるような、人間の生き方や文化を人びとは選んだのである。つまり自然（生き物）との共生を幸せに思う人びとの生き方である。

里山についても正しく理解されるようになってきた。里山は人びとの生産活動や生活のために長い間利用されてきた。水田農業の肥料、薪炭、山菜採り、養蜂、椎茸栽培など、森は宝の山として利用されてきたが、商品経済の発達とともに人びとは里山の資源を捨てたのである。人びとが里山を利用しなくなり人間と分断されて初めて、人間が里山を利用することの意味が現代人に理解されるようになった。すなわち里山で人間が一方向的に自然を搾取していたのではなく、人間の介入で多様な動植物が生きているのであり、生態系全体として人間と自然は共生しているのである。分断の発想では自然との関係は正しく理解されないが、日本や世界各地の伝統的な自然利用の事例から、人間と自然の相補的な関係が次第に理解されるようになった。

2. 私の活動：フィリピンの森林再生も人と自然の関 係の再構築

人間と自然の関係の再構築は世界の共通の挑戦である。ところ変われば再構築の内容も変わる。私が最近関わっているのは、フィリピン・ヌエバビスカヤ州サンタフェ町の森林再生事業である。フィリピンでは西暦1900年頃におよそ国土の70%が森林に覆われていたが、伐採されて2000年には20%以下に減少した。経済開発を急いだ戦後の特に1960年代以降に大量の伐採と木材輸出が行われ、サンタフェ町では1980年代には輸出できる木材資源はほぼ枯渇して、その後の土地の農業利用により禿山の景観が広がった。

山に森林が無くなると、住民の生活を支える森林資源が失われるだけでなく、水源の枯渇や地すべりの発生などにより、生活の基盤そのものが破壊される可能性が高まる。これは人間と自然の関係が悪化した状況である。森林を再生して豊かな自然資源を回復し、自然に依存する住民の生活に寄与することは、環境のためというよりも、まず貧困緩和の必須の条件である。その貧困の緩和が住民の生活基盤である山野の自然を保全する。まさに人間と自然の関係の再構築が重要課題なのである。

このような状況の中で、1990年代からサンタフェ町やその周辺で、植林や造林活動を実施するNGOが現れた。そして現在NGOの育林作業によって、部分的ではあるが森林は順調に生長している。但し植林と造林に成功すれば、それで終わりというわけではない。植林や造林よりもさらに困難な次の課題は、まさに人間と森林(自然)の共存・共生する関係を創造することである。森林は常に危険にさらされている。最大の危険は盗伐や山火事である。

これらの危険から森林を守るのは、森林周辺の住民において他にいない。なぜならNGOが広い森林を四六時

中見張ることは不可能だからである。従って森林とその近隣住民が共生できる互酬関係を築くことが不可欠である。近隣住民は森林資源を利用し、森林は盗伐や山火事から近隣住民によって守られる、という関係である。世界の多くの森林は伝統的にそのようにして守られてきたのであるが、近代国家の成立と共に森林が国有化されてその関係が壊れた。自分たちの資源として利用できなくなった住民は、森林を守る動機や制度的な正当性を失ったのである。そして現在、新たな社会的な仕組みを形成して、人間と森林の関係を築く必要に迫られている。いかにしてどのような仕組みを形成するのか。その課題を考えながらサンタフェ町への訪問を私は繰り返している。

3. 大塚かぐや姫プロジェクト：地元で人と自然の関 係の再構築

私たち広島市立大学の教員や学生の多くは都市生活者である。都市では、煩わしく人間の思い通りにならない自然は、生活の周りから遠ざけられる。それは人間と「人間の外なる自然」との相克だろう。自然は好いものであるがありがたくないものもある。たとえば害虫や害獣や雨や嵐は疎ましい。また機械文明では、人間の身体能力(=自然の力)を機械に預けて、「人間の内なる自然」を退化させている。現代文明の中で暮らす私たちは、「人間は自然の一部」と言いながら、このように人間の内と外の自然を遠ざけて、内には人間疎外そして外には自然破壊を続けてきた。人間と自然の関係の再構築は私たちの足元からの要求である。

自然から離れた私たちを自然に近づける活動が「大塚かぐや姫プロジェクト」であろう。プロジェクトの概要はここで説明する必要はない。このプロジェクトを主導する前川義春教授は竹の間伐作業を以下のように表現す

る。
「…若い人が竹を切り出す、日が差し込む。自然の現象を肌で感じる。竹の材質感を感じながら、素材を感じて作品を作る。」「…体も限界まで使うから体の調子がえらく良くなる。坂道を1日何十往復する。1年に1回はやった方がよい。3年は付き合っこのプロジェクトやってみて。日本の国民全員が近くの竹藪を伐ることをやってよいと思う。本当に楽しい。」

これは感性の表現である。私はこのプロジェクトの意味を次のように解釈する。すなわち私たちが自然と交わる。私たちがそっぽを向いてきた「自然=命の仲間」と仲直りをして、つき合いを再び始めたのである。人が自然を利用し自然を守る。間伐という自然の世話をし、自然そのものを生かして、人間の社会にも生かす。健康にも、心にも、人間関係にも好影響をもたらし、人と自然の関係の再構築（共生）を模索する試みである。それは人と自然の関係に留まらず、人と人との関係にまで及ぶ。間伐作業は体を使った人びとの共同作業であり、互いの「内なる自然」を活性化するのである。

人間と自然の関係の再構築は人間の理性のみでは実現できない。理性の働きは先述したように、自然を人間から遠ざける側面があるが、感性の力は自然の生命を感じ取り、自然と人間を近づけるのである。大塚かぐや姫プロジェクトや里山活動は感性の鍛錬であろう。生きとし生けるものの「われらはみんな生きている♪」感覚は、人間と自然の共生を促す基礎である。レイチェル・カーソンが言うように「知ることは感じることの半分も重要ではない」のであり、宮澤賢治が言うように「水や光や風ぜんたいがわたくしなのだ」。感性を活性化させることなくして、人間と自然の共生を回復することはできないだろう。

そして迎えた10月4日は「竹林ライトアップ／交流

会」である。間伐に参加し、作品を制作した芸術学部の教員・学生、そして一般市民の方々が参加した。人と自然の関係の再構築という本稿の主旨から考えるならば、このイベントや作品展示の意義は、一般市民を竹林の自然の中に招き寄せたことであろう。作品やイベントがなければ、市民はわざわざこの竹林に入らない。都市化は人びとを里山から遠ざけたが、このプロジェクトは人びとを自然に近づけたのである。竹林の中は歩きにくい山道である。舗装道路を歩く現代人は山道に分け入ることを厭う。それにも係わらず、歩きにくい山道に入るとは、人びとをさらに自然に近づけるのである。それは人間と自然の関係の再構築へ向けた一つのステップである。

4. まとめ：環境革命の前線を大塚から世界に拡大
大塚かぐや姫プロジェクトは環境革命の前線である。荒れた竹林を間伐する人と自然の交流、竹を素材にして作品を作り、自然の「仲間」と協力する制作活動、そして作品を展示した竹林に市民を招き寄せ、イベントにより自然の中で人びとが交流する営みなど。これらはすべて、私たちの大学の足元を舞台にして、人間と自然の関係を再構築する活動である。人と自然を近づけ、人と人を近づけることは、現代社会の病理を治癒する不可欠の条件である。大学の足元で生まれたローカルなプロジェクトであるが、自然と交わる感性と人と人が交わる社会の力を、一つの文化として世界にさらに広げたいものである。

(なかしま まさひろ／国際開発論、環境管理論)

大塚かぐや姫プロジェクトと「監視」の論理：美術と社会と国家との関係への考察

ウルリケ・ヴェール（広島市立大学国際学部教授）

「ワー、きれい！」「へー、おもしろい！」「見てごらん、すでい！」。日が暮れたところ、ろうそくの灯火に照らし出された生きた竹の柱、そしてその中間に、またはそれを囲んだり含めたりしてできた不思議な構造物。竹のすべすべした触感の再発見、竹でこんな物もできるという、素材の可能性と作者の想像力への驚き、「自然」と「文化」の調和への感動。大塚の竹やぶの幻想的な変容を（とくに2007年にも2008年にも行われたライトアップの際に）見た人の多くはこのように感じたのではないのでしょうか。

ところで、大塚かぐや姫プロジェクトは、メディア（特に地方のテレビ局）にも注目されました。それは、広島市立大学芸術学部の活動、とくに地域の人たちとの共同プロジェクトとして画期的なこの企画について広く知ってもらうためにはとてもよいことです。ただし、その報道の主旨には少し違和感を覚えたのも事実です。つまり、「不法投棄対策としてのアート」といった見出しに。

「美術とは何か」という問いにたいして近代において様々な議論がなされてきたが、（作品に内在していると思われた）「美」を通じて鑑賞者に一定の精神的な体験をさせ、彼・彼女らに何かを悟らせるのが美術の目的だということは、それらの議論の多くに底流している考え方でしょう。つまり、美術は目的そのものではなく、それはなんらかの理想的な意味において人間、社会に働きかけるものだという理解です。だったら、ゴミ捨てをやめさせるという目的でもいいのではないかと思われるかもしれませんが、この推論にそのまま賛成することはできません。しかし私の主張を、美術は高邁な理想を目指すべき、つまり「ゴミ捨てをやめさせる」ことは美術の目的としてはつまらないものだという意味でとらえられたら、それは誤解です。

ゴミ問題は確かに、現代の大量消費社会の大きな問

題である以上、ローカルな次元（例えば、大塚のような地域の問題として）でもグローバルな次元でも認識され、「先進国」の住民である我々の生活や意識が根本的に問われる契機とされるべきです。そして美術も「ゴミ」を問題化すべきだと私は思います。実際、環境問題は世界的に現代美術の重要なテーマとなってきました。2004年にドイツで始まった「RE-ART ONE」という、リサイクルアートを中心とした展覧会はこれを示す一例です。実は、大塚かぐや姫プロジェクトのなかにも、リサイクルアートの作品があります。ゴミ問題を主題としていたはずのテレビ報道にはこの作品が取り上げられなかったのですが、竹や現場の整備の際に出てきた空き缶、瓶、陶器などを組み合わせて作られたこの「広島安佐南区の土俵」（制作：黒田大祐、他）こそ、地域のゴミとの戦いを端的に表現していると感じられました。

したがって、私が違和感を覚えたのは美術表現の内容自体ではありません。ここで問題にしたいのは、「ゴミ」というテーマ自体というより、そこに潜在している権力関係です。つまり、あるテーマを掲げる（あるいは掲げさせられる）ことでアーティストが（そして私のような学者も）支持することとなる言説は、制度や権力とどのように結びつくかを考える必要があるということです。現在の日本において「ゴミ問題」、とくに「不法投棄」問題は、国、自治体、市民等が連携して取り組むべき重要な問題として認識されています。そして、その対策として平成19年度から「全国ごみ不法投棄監視ウィーク」というものが設定されましたが、その名称や主な活動内容でもわかるように、自治体や市民に期待された役は「監視」というものです。大塚かぐや姫プロジェクトに対するメディア報道もこの監視論理にのっかって、ゴミ問題を創造的に扱った作品に全く言及しない一方、プロジェクトのための整備によって「見通しがよくなった」（つ

まり、監視しやすくなった)竹林にゴミを捨てる人がいなくなったことだけ強調したわけです。

以上述べたような、市民による相互監視を権力装置とする社会は、私が生まれたドイツと長年生活してきた日本における戦前・戦時下の歴史を想起させ、実に気味悪いものです。ところで、両国の歴史におけるこの時代は、美術自体が国家に監視され、プロパガンダに利用された時代でもあります。大塚かぐや姫プロジェクトでもわかるように、広島市立大学芸術学部のドイツとの交流はとても実り豊かなものです。これからも、両国の過去への反省に根ざした、美術と社会と国家との関係への批判的な意識を共有しつつ、社会問題や環境問題を含めて人々の感覚と意識に訴える共同プロジェクトや共同作成を続けて欲しいと思います。

(ウルリケ ヴェール／日本研究)

竹林と身体

関村誠（広島市立大学大学院大学院芸術学研究科 教授）

はじめに

竹林のなかで汗を流し一心にある作業に専念することは、われわれに何をもたらすであろうか。普段は思いもしなかったものに感覚や思考が向かっていくことになる。それは自分と自分の周りの環境との関係にある種の変容をもたらす経験となる。竹林に入りそこで作業や制作をすることは、特殊な経験とみることもできるが、われわれと世界の本質的な関係を見直す経験であるように思われる。

われわれは、普段の生活においては、この世界の中で「わたし」というものが確かなものとして存在していると思っている。「わたしはわたしである」という自意識をもっていなければ常識的な生活を営むことはできないだろう。しかし他方で、「わたし」は常に一定ではなく、変容していく。今この瞬間にも考えること・思うことは変化していく。確実な仕方では「わたし」がわたし自身を把握することは不可能なのかもしれない。「わたし探し」というような言い回しにも端的に見られるように、われわれはそれぞれ「わたし」とは何かという答えのない問いかけを続けていくように運命づけられているとも言える。しかし、観点を変えてみると別の見方ができるように思われる。現代人は「わたし」という独立したものの確かな存在を不用意に想定しすぎているのではないだろうか。竹林に入ることが、この固定した自意識にゆさぶりをかけ変動を与えて自己反省を促し、それまでとは異なったかたちでの自覚に至るきっかけになるように思われる。

「かぐや姫プロジェクト」は、主として竹を素材とする芸術制作の実験の展開として機能しつつ、そこに参加した人々の自意識にある種の変容をもたらし、周りの環境や他者との関係のあり方、さらには共同体のあり方についての再考を促す試みであったように思われる。こうした見方を基礎づけるために、以下、本稿では、身体性と風土性の問題を考えていきたい。

1. 身体

竹林に入るとき、われわれはその空間のあり方を全身で感じとることになる。美術館やギャラリーのいわゆるホワイトボックスに入ってそこに展示された作品を見ようとする場合は異なっている。われわれが作品を前にして自分自身の視覚を主として純粋に働かせるように条件づけているのが、ホワイトボックスであるとも言える。竹林に入る者は、視覚のみではなく、聴覚、嗅覚、触覚がそれ以前とは違った仕方ではじめることになるであろうし、気温や風や光などの変化が合わさった竹林独特の雰囲気全体を感じ、その中で呼吸している自分自身を感じるようになる。言い換えるならば、わたしたちは自分自身の身体のあるようを自覚的に意識せざるを得なくなるのである。

空間の見方や芸術制作と身体性との関係について、モーリス・メルロ＝ポンティは哲学的思索を展開した。この20世紀フランスの哲学者の考察に依拠しながら、日本の里山の竹林でわれわれがあらたに意識することに

なった芸術と身体との関連性について考えていこう。メルロ＝ポンティの思想の根本には、世界に対するわれわれの接触の様態についての真摯な問いかけがあり、それは身体性をともなった芸術制作や空間意識の問題と通底しているのである。

この問題を掘り下げていくために、まずはメルロ＝ポンティの科学批判を一瞥しておきたい。われわれが竹林に入っていない時の常識的な空間意識を、メルロ＝ポンティであればどう捉えるだろうかを考えることができるであろう。彼の最後の著書『眼と精神』は、次のような言葉からはじまっている。

「科学は物を巧みに操作するが、物に住みつ়くことは断念している。」¹

科学は世界を透明感をもって捉える巧みさを有している「器用で、割り切った思考」であるが、「現実の世界とはほんの時たまにし、か顔を合わせない」のである。もっとも、メルロ＝ポンティは、古典科学においては世界に対する不透明さの感情もあつたことは認めていゝ。しかし、彼の同時代に至るまでには、新しい考え方が出てきて、「科学の構成作業は自らをそれだけで自律的なものと思ひ込み、またそうなりすましており、そして思考というものも、自分の案出した一群の捕獲術や瞞着術にきれいに還元されてしまつていゝ」。身体性を孕んだ現実世界というメルロ＝ポンティの捉え方は、近代の科学による物の見方とまったく異なるものである。

現実の世界に住みつゝている生（なま）の感覚は、われわれに身体にとって直接に捉え

られるものであるが、それを科学の「操作的」思考はすくいとすることもできないし、もともとそうしようとも望んでいない。この科学的思考のあり方を、メルロ＝ポンティは「上空飛行的思考」（pensée de survol）と呼ぶ。現実との具体的な接触なしに、対象を客観的に見て技巧的に取り扱おうとする思考態度に対する批判的見地からの呼称である。今日のわれわれにあつても、こうした科学的思考がわれわれの物の見方において常識的な基盤となつていゝことは否定できない。それゆゑ、メルロ＝ポンティの次の言葉は、われわれに重い意味をもつて訴えかけるものといゝえる。

「科学の思考——上空飛行的思考、対象一般の思考——は、それに先立つ「そこにある」（ilya）といゝことのうち、つまり、われわれの生活のなかで、われわれの身体にとつてあるがままの感覚的世界や人工的世界の風景のうち、またそうした世界の土壌の上に、連れもどされなくてはならないのだ。」²

このように、科学の「上空飛行的思考」にとらわれることなく、それによつてわれわれが世界の現実を感じつゝている身体性を省みるべきであるとメルロ＝ポンティは主張する。物を操作的に扱ふことに長けてはいるが「物に住みつ়くこと」は断念してゝいる科学の思考の枠組みの桎梏からわれわれを解放して、物そのものとの本来的な接触の場にに至らせるのが身体なのである。『見えるものと見えないもの』においても、メルロ＝ポンティは、われわれを物そのものに到達させうるのは、身体だけであることを強調し、「物それ

1 M.メルロ＝ポンティ『眼と精神』滝浦・木田訳、みすず書房、1966年、p.253.

2 同書、p.255.

3 M.メルロ＝ポンティ『見えるものと見えないもの』滝浦・木田訳、みすず書房、1989年、p.188.

4 M.メルロ＝ポンティ『眼と精神』滝浦・木田訳、みすず書房、1966年、p.255.

5 同書、p.257.

6 同書、p.257.

7 同書、pp.258-259.

8 同書、p.260.

自身は、平板な存在ではなく、奥行をもった、上空飛行的主観には到達不可能な存在であり、もし可能ならば、同じ世界の中で物と共存している主観にのみ開かれている存在³であると述べている。

竹林に入ることは、われわれが物そのものに到達することのできる場をもつことでもあると言えるだろう。それは、身体性を意識しつつ、まさに「世界の土壌の上に」われわれ自身を連れもどすひとつのきっかけになるだろう。竹林という土壌においてわれわれは「同じ世界の中で物と共存している」われわれ自身を自覚することになるのではないか。「かぐや姫プロジェクト」は、この物そのものと密着した共存関係をもつことと芸術活動との接点を探り、竹林の中でのわれわれの身体感覚を芸術の実践に結びつけようという試みである。メルロ＝ポンティは、『眼と精神』において、科学では果たすことができない物そのものへの到達について、芸術家の行為の重要性を取り上げている。

「ところで芸術、とりわけ絵画は、〔科学的思考の〕あの活動主義〔＝操作主義〕がおおよそ知ろうとは望まない〈生まな意味〉(sens brut)の層から、すべてを汲みとるのだ。まさしくそれだけが、まったく無邪気にそれをやったのける。」⁴

メルロ＝ポンティにとって、芸術とは、科学の思考によっては到達できない世界とのいきいきとした共存へとわれわれを連れもどしてくれる最たる手段として考えられている。そこでは、とりわけ画家とその身体性が問題

化される。「画家はその身体を世界に貸すことによって、世界を絵に変える」⁵とメルロ＝ポンティは言う。

この画家の身体性の問題化のなかで、人間と世界との関係が、近代科学の見方とは異なった仕方でも考察され、われわれの身体それ自身も物のひとつであるという考えが前提とされる。「私の動く身体は目に見える世界に属し、その一部をなしている」⁶。その他、メルロ＝ポンティ独特の言い回しを引用してみる。「〈見る者〉も、それ自体目に見える〈身体〉によって〈見えるもの〉のうちに浸り入っている。「見る者はただそのまなざしによって物に近づき、世界に身を開くのである」。「私の身体は世界の織目のなかに取り込まれており、その凝集力は物のそれなのだ」。「世界は、ほかならぬ身体という生地で仕立てられていることになるのだ」⁷。このように、われわれの身体には、見るものであると同時に見えるものであるという特殊な重なり合いを孕んだ「謎」があるのである。メルロ＝ポンティにとって、この身体の謎を「図解」してみせてくれるのが絵画の諸問題なのである⁸。

このとき、とりわけメルロ＝ポンティの念頭にあったのは画家セザンヌであり、この画家の言葉として、「自然は内にある」、また、色は「われわれの脳髄と世界とが接触する場所」であると語ったことなどを引き合いに出している。メルロ＝ポンティをいったん離れて、セザンヌ自身の手紙のなかにもこうした自然や世界との接触が彼の制作の基盤となっていたことを知ることができる。

「ルーヴルで巨匠たちの作品を見た後は、
急いで外へ出て、自然との接触によって本能
を、われわれの内なる芸術上の感覚を、生き
生きとしたものにする必要があります。(シャ
ルル・カワモン宛の手紙 1903 年 9 月 13 日)」⁹

「自然に即して実現しないとイケないのだ。
(息子ポールへの手紙 1906 年 10 月 13 日)」¹⁰

この自然との接触について「自然に即し
て」という表現をセザンヌはたびたび用いて
いる。もちろん、竹林の中で自然との接触を
経た上でそこからとれる素材をもとに制作す
ることは、セザンヌの絵画における「自然に
即した」探究と異なっているのは明らかであ
る。しかし、竹林における作業と制作行為が、
自然に対峙する際に「上空飛行的思考」を常
識として捉えているわれわれ現代人に対して
も、「自然との接触によって」われわれの内
なるある種の本能的な感覚をいきいきと蘇ら
せることになり、それはもうひとつの「自然
に即した」行為とみなすことができるであろ
う。

それはまた、われわれ自身と世界の関係
のあるべきあり方を、反省的に考え直す視点
をもつことができるための基盤ともなるよう
に思われる。こうした世界とわれわれの関係
についての捉え方は、近代的な空間概念、す
なわち、空間を等質的なものとみなすデカル
ト的な考え方とはまったく異なっている。メ
ルロ＝ポンティは、この近代の空間概念とル
ネサンスの遠近法の技法とのつながりを指摘
し、美術史家パノフスキーの仕事に依拠しつ
つ、古代からの球面視野を前提とした角度の
遠近法を考慮しないルネサンスの線遠近法
の技法は空間把握の正確な解決ではないこと

を明示している¹¹。

また、身体と世界との関係について、『知
覚の現象学』において、メルロ＝ポンティは
次のような印象的な言い回しをしている。

「私の身体が世界のなかにあるあり方は、
ちょうど心臓が生体のなかにあるあり方と同
じである。すなわち、身体は目に見える風景
をたえまなく生かすつづけており、風景を生気
づけ、風景に内部から栄養をあたえて、風景
とともにひとつの系をかたちづけている。」¹²

心臓が生体の一部であるとともにそこに血
液を循環させているのと同様に、身体は世界
のありようと切り離しがたい存在として理解
されている。さらにまた、『見えるものと見
えないもの』においても、メルロ＝ポンティ
は「世界の肉」という言葉からはじまるノー
トに次のように書きつけている。

「私の身体は世界と同じ肉でできている。」¹³

ここでは、われわれの身体とまわりの風
景や環境とが同じ「肉」からできているとい
う意識のもとに世界観が提示されている。対
象を客観的で冷静な立場から見る場合とは異
なって、竹林という自然風土の中に入ってそ
こで呼吸しつつ自分と環境との関係を省みる
とき、その風景の中でわれわれ自身の身体が
まさに「風景とともにひとつの系をかたちづ
くっている」と実感できるように思われる。
またそこから「世界の肉」という一見特異に
みえる表現も納得できるのではないだろう
か。

20 世紀のフランスの哲学者の思索を日本
の竹林の風土に結びつけるのは異様に感じら
れるかもしれない。この世界の肉性を指摘す
る考えは近代のパラダイムを超え出るための

9 ジョン・リウオールド編
『セザンヌの手紙』池上訳、
美術公論社、1982 年、
p.234.

10 同書、p.266.

11 M.メルロ＝ポンティ
『眼と精神』滝浦・木田訳、
みすず書房、1966 年、pp.
276-277.

12 M.メルロ＝ポンティ
『知覚の現象学 2』(1945)
竹内・木田・宮本訳、みす
ず書房、1974 年、p.3

13 M.メルロ＝ポンティ
『見えるものと見えないも
の』(1964) 滝浦・木田訳、
みすず書房、1989 年、p.363

14 和辻哲郎『風土、人間学的考察』（1935年）岩波文庫、1979年、p.3.

15 同書、pp.21-22.

16 オギュスタン・ベルクはこの事実を強調する。「哲学者として、この世界の肉性を指摘したのはメルロ＝ポンティが初めてではない。『知覚の現象学』（1945年）以前にすでに『風土』（1935年）にこの考え方が示されている。」（オギュスタン・ベルク『風土学序説』中山訳、筑摩書房、p.328）

現代西洋における重要な概念ともいえる。しかし、日本における「風土」に対する伝統とそれに対する思索には、「身体」と「肉」にかかわるメルロ＝ポンティの思想との接点を見出すことができる。次にそのことを見ていこう。

2. 風土

メルロ＝ポンティとは異なった観点であるにせよ、身体あるいは肉体を空間意識と関係づけた上で、日本の自然風土を論じているのが、和辻哲郎である。その著『風土』において、科学の対象である自然環境とははっきり異なるものとして風土を提示している。この著書の冒頭で和辻は、「この書の目ざすところは人間存在の構造契機としての風土性を明らかにすることである」¹⁴と述べている。『風土』は1935年に出版されたが、和辻のこの著は、彼が1927年から1928年までのドイツ滞在中に読んだハイデガーの『存在と時間』（1927年に出版）からの影響下に1929年から書かれはじめた原稿をもとにしている。『風土』の「序言」において、和辻が風土性の問題を考えはじめたのは出版されて間もない『存在と時間』を読んだ時であり、和辻にとって、人間存在を時間性として把握するハイデガーの試みは興味深いものであったが、同時に「空間性」が同じく根源的な存在構造として活かされるべきであるとの問題意識をもったということが明記されている。和辻は、人間存在の個人性と時間性に重点をおくハイデガーの思想に彼の「仕事の限界を見た」のであり、人間存在は個人的であるとともに社会的であり、時間性ととともに空間性に大きく依

存しているとみなすのである。

「人間存在の構造契機としての風土性」を考えていこうとする和辻は、「主体的な人間存在」にかかわる立場から風土の考察を行ない、風土を自然環境という「対象」としてみなすことを避けようとする。それゆえ、「たといここで風土の形象が絶えず問題とせられているとしても、それは主体的な人間存在の表現としてであって、いわゆる自然環境としてではない」と主張されている。和辻にとって風土の現象は人間の「自己了解」の表現なのであり、風土は自然科学的对象ではないことが強調されている。

このように、和辻の思想の基盤には先にみたメルロ＝ポンティと同様に科学批判の精神が見られるのであるが、メルロ＝ポンティが強調していた身体性に関しても、和辻は『風土』において次のように述べる。

「風土もまた人間の肉体であったのである。しかるにそれは、個人の肉体が単なる「物体」と見られたように、単なる自然環境として客観的にのみ見られるに至った。そこで肉体の主体性が恢復されるべきであると同じ意味で風土の主体性が恢復されなくてはならぬのである。」¹⁵

ここで和辻は、われわれを取り巻く空間に関連してメルロ＝ポンティと同様に「肉体」という表現を用いていることに着目したい。身体あるいは肉体を、まさに風土との関係で論じているのである。しかも、身体性の哲学を発展させたメルロ＝ポンティの『知覚の現象学』（1945）以前にすでにこの世界の肉性を和辻が先立って指摘していたということは強調しておかねばならない¹⁶。

和辻がここで「風土もまた人間の肉体であった」と過去形で語っているように、『風土』執筆時の日本ではすでに、風土を肉体として捉えるという感性が廃れてきていることがわかる。人間の自己了解が可能になる風土が、普遍空間を前提とする近代的な意識によって客観的対象とされてしまっている状況は、今日でも、否、今日ではよりいっそう顕著に日本社会において見てとれることである。われわれを取り巻く自然環境を科学的な対象としてみなすことは常識ともなっている。風土の肉性を恢復することは、自然とのいきいきとした接触の実感のともなう場を取り戻すことであるともいえる。

たしかに、『風土』という著書自体は、和辻がドイツ留学という機会を得てさらにハイデガーの思索に出会わなかったら世に出ることはなかったであろう。しかしながら、風土の概念自体を掘り下げて考察しようとした和辻の態度は、西洋思想の影響下によるものとしてのみ説明づけられるものでないことは明らかである。和辻の思想構築の基盤には、日本の伝統的な空間把握の感性があったと思われる。それに関連して、『風土』第一章「風土の基礎理論」において次のような言及をまずは見よう。

「ここに風土と呼ぶのはある土地の気候、気象、地質、地味、地形、景観などの総称である。それは古くは水土とも言われている。人間の環境としての自然を地水火風として把握した古代の自然観がこれらの概念の背後にひそんでいるのであろう。」¹⁷

坂部恵は、こうした和辻の風土概念を「主客の明確な分離以前の基層的な（時間一）

空間体験において、親密性（またときにはその裏面の敵対性）の相貌をおびてたちあらわれてくる自然環境の謂い」¹⁸ と言い換えている。また坂部は、人間が自然との関係の中で人間として存在し、自然において自己自身を見るという和辻の考えが、『風土』において、「一貫して〈直観〉の方法によって、いかにえれば、〈説明〉よりは〈理解〉の方法に即して構成されている」という点を踏まえた上で、次のように述べている。

「もともといわば主客の明確な分離以前の基層的な生の空間を一貫して思考のより所とし、〈理解〉に相当する方法を自然にまで及ぼすことをむしろならいとして来た日本ないし東洋の伝統によって立つ和辻には、新しい見通しをひらくにあたって、ある立場上の優位があったといっても、それほど見当ちがいはないだろうとわたくしは考える。」¹⁹

風土を肉体とみなしうるような自然観を、日本人は根源的な感覚として保有していると言える。坂部の表現をかりるならば、「内が同時に外であり、外が同時に内であって、外のものもまたある意味で内側から生きられるような空間性」²⁰ についての意識感覚は、風土という概念が文化と切り離せない側面をもっている日本の伝統においては古来からの自然観に即したものである。

この日本的自然観は、日本人の自己意識の構造と切り離すことができないであろう。木村敏はその著『人と人との間』において、日本人において自己の根拠が人と人との間という究極的な場所に置かれていることを明確にしようとしている。「キリスト教徒にとって神の存在が絶対的な現実であるのと同じよう

17 和辻哲郎『風土、人間学的考察』（1935年）岩波文庫、1979年、p.9.

18 坂部恵『和辻哲郎 異文化共生の形』岩波現代文庫、2000年、p.99.

19 同書、pp.101-102.

20 同書、p.105.

21 木村敏『人と人との間』弘文堂、1972年、p.65.

22 同書、p.75.

23 M.メルロ＝ポンティ『眼と精神』滝浦・木田訳、みすず書房、1966年、p.282.

24 同書、p.255.

に、日本人にとって人と人との間という場所の实在性は、どうにも抜き差しならぬ現実性を帯びたこと²¹であるとされる。世間というものを気にしつつ行動し、神に対する罪の意識よりも他人や世間に対する恥の意識を強くもっているのが日本人であろう。「日本人にあっては、自己は自己自身の存立の根拠を自己自身の内部に持っていない」²²のである。自己が自己の根拠を外部に見出すことは、日本的な自覚構造である。自己の存在が依存する外部とは、他者や世間から自然にまで拡張することができる。風土とは自己了解の場としての自然であり、自己自身をそこから見出して自己にとっては外の場なのである。

結び

竹林に入るわれわれ自身の感覚を省みるとき、われわれはわれわれの身体性を意識せざるを得ず、その身体性は風土という人間と自然の接触と相互浸透の場に根拠づけられていることが実感できるのではないだろうか。芸術が、対象を客観的・技巧的に取り扱う「上空飛行的思考」の枠組みから脱して、自然の土壌の上にわれわれを連れもどして、世界と切り離しがたく存在する自己への反省を踏まえた活動のあり方を模索しようとするのであれば、竹林は、自己の蘇生の場であるとともに、芸術的可能性に満ちたものとして立ち現れてくるであろう。この現れは、ルネサンスの遠近法が窓の向こうに見ようとしたような客体としてではない。自然の現れが自己の了解でもあるという仕方では自覚されるのである。自然は自己に対峙する客観的存在ではなく、自己と浸透し合い交流し合っており、そ

のこと自体が自己が自己であるという自覚と自己了解とを基礎づけている。メルロ＝ポンティが言うように、「世界は私のまわりにあるのであって、私の前にあるのではない」²³のであるから。

竹林における芸術へ向けた活動の意識や、竹林での芸術が波及させていく意識変容は、自己と世界の問題だけではなく、他者との関係の問題にも拡張してくることになる。われわれの自己意識の変容において自然と通じる身体性を自覚するに至ることは、他者もまた同様にそうした身体性をもつ存在としてわれわれに現れてくることにつながってくるからである。じっさい、「かぐや姫プロジェクト」においては、地域の方々も自然なかたちで竹林の中での活動に参加していた。整備され作品の設置された竹林の風土的空間を散策・鑑賞してもらうことを通じて、他者との交流の場の重要性が自然に対する意識と連動してある程度は感じられるようになったと思われる。われわれがこれまで見てきた、竹林の中での自己と世界の見直しは、ふたたびメルロ＝ポンティの言葉をかりれば、「この私の身体とともに、多くの共同的身体、つまり〈他人〉もまた蘇ってくるに違いない」²⁴のである。

「かぐや姫プロジェクト」に参加した者は、誰もが日常とは異なる仕方空間を意識し、自分の感覚のありようをあらためて省みることになり、それは竹林を通しての共同体の基盤形成に向けた寄与のひとつとしてみなすことができるであろう。

(せきむら まこと／美学・哲学)

Web site

三年間の竹林整備、作品展示の作品展示の様子を主に参加学生の参加学生の視点から記事にして、ブログ形式でアップロードした。制作の合間、休憩時間の様子などを含め、現場の雰囲気を生きた状態で伝えるために開設された。展示終了後も現在まで公開中。

<http://ozuka.art.hiroshima-cu.ac.jp>

Web デザイン、ページ構築

中村圭 (広島市立大学芸術学部 非常勤助教)

大塚かぐや姫プロジェクト

広島市立大学前竹林再生プロジェクト 2006-2008
閑散した竹を利用するアート作品と空間演出
作品展示：2008.10.1 (水) ~10.15 (水)
※展示期間を延長しました→10.19 (日)迄



竹やぶ掃除

2008.09.27 Saturday 18:51

今日は朝から竹やぶの掃除です。これでNHKの取材がきて大丈夫。



みんな朝から全力でがんばります。



「おっ、今日もみんながんばってるな」



葉っぱの影から美少女が...

プロジェクト概要

プロジェクトチーム

お問い合わせ

Calendar

<< January 2009 >>

Sun	Mon	Tue	Wed	Thu	Fri	Sat
			1	2	3	
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

Selected Entries

竹色夏休み (09/29)

竹やお掃除 (09/27)

ほっこりおいも (09/26)

Categories

新築風景 (3)

2008年活動記録 (23)

2007年活動記録 (20)

2006年活動記録 (11)

Archives

October 2008 (2)

September 2008 (24)

October 2007 (2)

September 2007 (18)

January 2007 (1)

November 2006 (3)

October 2006 (1)

September 2006 (6)

Recent Trackbacks

公開初日

⇒ おしゃべりしゃべり (10/07)

Links

ひろしま森づくりコミュニティネット

広島市立大学

スタッフ専用

ログイン

Profile

matsumae

吉田幸弘

中村圭

Others

RSS1.0

Atom 0.3

Count: 8494

powered by Serene Bach 2.1.7R

Template by Twilight bookstore

編集 大塚かぐや姫プロジェクトチーム

写真撮影 木下裕介
大津智之
吉田幸弘
藤原信
前川義春
土井満治

デザイン 和気琢哉

翻訳 渡辺恵

印刷 (株) インパルスコーポレーション

発行日 平成21年3月

発行 大塚かぐや姫プロジェクトチーム

広島市立大学芸術学部 前川研究室

〒731-3194 広島市安佐南区大塚東三丁目4-1

Phone. 082-830-1507